



源氏物語抄卷第三

目錄

若山了事記

寸心流石記



疝痾久し疝をよ小兒の中瘵チふとの出まてのくはて

も云ふよとらとやと云也何毛の中より出ると也

疝コ 小兒ノ口カサトモヨム 疝 久病故固ラ疝カフリニ書

まゝひのち 厭術也 花鳥の撰

秋深経秋場寒月照白鼻ラ 杜子美 子璋觸髅血模糊コ

提挑也崔大夫 芝草花カの詩也 非杜詩

い句と補式シはハて服用と云々

如持きよふ云院ニ羅尼力也 夕切がれ以後胸氣なこふ

ゆへまゝひのちちやよや

小山 鶴馬寺 若ハ四十九院 河よ委

まゝひのちひのち ま人のそか持まのそ一吹フ

まゝひのちひのちと偽ニ程よりつりてあへて煩ワと也

心と可レ符語抄ニ也

心シのころノ 為教シニヨラス心ヨミ

世セ依イ志シうウむムうウとと云也

めメにニけケるルもす 田タ麩フ院 瘡サ痛ウをウりリとせセぬヌ時

天台座ザ立リ良リ源源僧僧正正とめめられし事事をを元元回回年年林

乃ノりリ也也小小野野玄玄心心府府記記見見るる時時人人以以良良源源僧僧正正 標標藤

化化佛佛比比呵呵被被龍龍筆筆并并執執杖杖何何因因因因二二人人其其故故更更 比比物物大

僧僧正正 花

山山れれささくくくく 中中ままふふ不不及及 花花乃乃花花ををおおけけくくとと云

野野のの山山乃乃標標ややままくく感感ががりり 山山路路のの家家可可思思とと云

ばんぐつれ 強方 洗強也

さあつゝまもの 狩也 射也 せうぎし 徹乃字

おの茶を飲回定のむじとがり 食回字

けくらさり 又選 九折 盤折日 通志巔 白氏文集

清少納言抄双紙より

ちゆくそと紙き拍 めうまれけくらさる

さうし小柴 勢のるうとれしなり

をらう 座席

さふ人 覚忍像部号ふ山像部 兼元拍經 三年(三)終お

おへし

かこもろう 肉(三)あへまの(三)けりあまの(三)ちり

已下用心寄め

さよけならわらも 像部れわらさる像部(一)又尼公の

うご乃女童(三)もや 時

まららハきせ給て 瘡を拍ふ(三)まららう(三)すめ(三)あけり

うーろの山 ちりへとを 不用

けさいみ(一)う ひ(三)さ(三)く(三)乃(三)志(三)の(三)り(三)業(三)出(三)と(三)さ(三)る

あーの山(三)は(三)れ(一)れ(一)あ またあ(一)乃(三)た(三)を(三)想(一)て(三)そ

あ(三)と(三)さ(三)む(一)う(三)す(三)あ(三)て(三)さ(三)あ(三)さ(三)ま(三)の(三)た(三)け(三)と(三)り(三)か(三)ら(三)ふ

や富士(三)浅間(三)と(三)新(一)て(三)云(三)ゆ(三)へ(三)なり

ちり(三)る(三)所 苑人(三)大夫 良法(三)経(一)也

り(三)と(三)ま(三)れ(三)守(三)の(三)子(三)あ(三)り(一)國(三)名(三)あ(三)ら(三)る(三)る(一)

北條山(三)の(三)ま(三)り(三)り(一)り
その(三)里(三)の(三)ま(三)り(三)り(一)り
その(三)ま(三)り(三)り(一)り

ゆびびの 寛字 ひろまじや 三老のち海河状のゆ
ほひのみあしぬのうらば乃まらん

あまののこさぶち ちんかちと存せ

法堂園白出家一して入る敷とや一入道と極て多國
備伸と新教ととと初て尺門み入をり人里

いさひとく一 ちんかちと存せ

うらばのうらばのうらばと云家丸

大原れくちうや 後隴丸

は儀理抄不審抄とて於可也

りてたり 出也 今まてよ出くぬめを百教のまら

携とみてぬくまん 羽恒

あん志の中お 大裏よ道儀よりをきてく國門一歳く

を利勢をふた也 山くけ乃中納云と云人ぬは例あり

おくまり 奥 おくまり 日本紀

こつ川は 仍 遊者と 去はとも

ふしぬ ひとぬと後儀なり 時

あまのくと 人子もあなつと進むやひしうとまら

く小餘考まき一とたり 時

ちんかちの 性 不ぬくまら

いしく 一何四ヶ年の君代と云こ

ふる心とく いとめふんをりるちり

海よりつる縁 爰れ若き一ゆへなりる

のいり王 キキキウテンニヨ 吉祥天女が説不道不引せと化物 花委

只而むき可鑑丸

のいさむきをめ いはさりけくあゝるる也

くく人よりしし 正月又日乃叙位シヨウは六位、花人を必巡シヨク

爵シヨクして後又位下叙シヨクき了却く事なり冠カウリとを爵シヨクれ事也

又今乃漆ウルクぬまの冠ハ浄慧シヨク天皇所代より始と云こ

のいさむきをめ 源氏乃所位シヨクのいくよのいなり

志シこのいしんそ 面白シてろくも也

とくそ我ゆへ 系圖シのい 経シもなり

とくく心をおあて可シ見 松尾シ巻る大井シの右の

益明親王シれとも物然も枝女シは吹シく可シ得シ心シも也 時

のいさむきをめ シヨク以シ鑑也

かさける人 至理シ國司シ不シ成シてとてまのいさむきを

次第シよりいさむきゆへなりへし

人よにりし人へくし成シゆりしとる也

ろく此シ忍シつめ 引シ言シ辨シ用シ別シる可シ也

くともみれろく寸シきれく 即シち前シおても源シ氏シ流シ小シ心シの

のいさむきをめ

花山吹ハ面汚朽系裏黄也ト花ニアリ

そうれろく さげ尾シとを童シかとの扱シあててと死シたる所

るあへし

山吹 山吹れきぬき両シ黄シ 裏シを山吹シを折シもて流シ

のいり王 キキウツエニヨ 吉祥天女が説不道不引せと化取 花委

只而ひき可張丸

のいりまひまめ いはえりーはくあゝるまじ

くく人よりしー 正月又日乃叙位シヨイは六位、花人を必巡シヨ

爵シヤクとて後又位下叙シヨき了却事なり冠カウクリとを爵此事也

又今乃漆ウルク奴里の冠ハ浄見魚天皇御代より始と云こ

のとすまふらう 源氏乃所信衣のくよのあなり

志このひしんそ 面白てらうをそ也

まこせゆへ 系圖のハ 注ともなり

こくうしんをおあて可見 松尾巻る大升の右の

益明親王はとも物然も枝女シメは吹シメして可得む也 時

のいりゆきて イロク以録也

かさける人 至理國司が成てとてまのてらふとる

次第よりしれゆへなりへし

人よにりーと人へくろ成ゆうととるや

ろこれ忍るめ 引言款用別る可也

くとみれたるー寸きれく 即ち前ふても源氏流ふ心川

のいひめなり

ちふつ 持佛

そうれうろ さげ尾と童コラかとの扱あてを死たる所

るあへし

山吹 うら山吹れまぬを両黄 裏を山吹を折もて流

三十五
栲葉カキハうゝ若也

うゝを扇カキを 髪カミをよき乃扇カキりたも人カミを

清必納カキ之栲双紙カキふ書り

あゆくをまなびて ちよとる息也

わらもへとりつちちて つさくひりとなり

まあーおほそよる 似たりと源思る也

いゆゑ 犬若と云ひ也 犬云

ゆきこ ちよとるカコもとりふなるる

さいかたれく 志うゝあゝひるる

つとらうあゝコケイヒキヤウ 彦ヒメ振ヒキ花ヒキ鳥ヒキ 汝ヒメ祢ヒメ戒ヒメ經ヒメ 温ヒメ般ヒメ經ヒメ子ヒメ持ヒメ

飛ヒキ比ヒキ丘ヒキ始ヒキ常ヒキ乃ヒキ拍ヒキをヒキもヒキ養ヒキ飼ヒキそヒキとなり

こちやと ころへと危カキ表カキ討カキ也

おらふ里 ちよひやのなる折るなる

ういやりと 髪カミれくちちをいつり

うんきー ねさあひ耐きりんきーをよせきりんきー也

しねるちと可カキむぬるや

糸カミひゆりん 網カミ釣カミ ねひゆ

まねハクききと 友カミ壺カミのめいなるお似カミよりむなり

こね若と 紫上カミの所母カミをりん

ちめ 目カミりく乃折カミ也かろく威カミふつていよわ

清カミやく 歳カミツヤ 又カミ光

おひささん言 成長カミ也とくくもを危カミひのそやとくさん

ふりも始末と思ふもゆへとよめり 雑草と禁上り
ておそ尼公の力上は言なる言となり

又おとろ 虫納云也

この草の言 禁上とゆへとさいめくさきむとさるゆふ
うとよめり

けをき袖 羽定乃ぬれ人くさひ人里

うのぬめりし 飯壺也

よぎり 色 よまろ 平声の町をまへ来むなり

仄声の町をまへ来むと云く私らの一とやをさるる

つしまりとあふ町をまぐる子用とらもあつる

山岳 近久積水キニセキと鴻管町ヒツウガノを飯半イハハシ浮算ウキサンと私シいふもいふも

コキテスグトニ
言也

傍部ナリ此振ナリをまそ乃まてと紙シられさむもありのまま

とつしまの言叶なり

ねろまなり かつくをけくると

いぬろ 去なり

果やうなる人の 雲キレシケル漢時カンジ平一人より曲マク其シれ思

流ナリと也ナリ只ナリるナリ流ナリりナリもナリ心ナリをナリ可ナリ難ナリ

りナリくナリしナリきナリ 源ナリ振ナリかナリうナリ思ナリぬナリ也ナリ

まナリくナリ一ナリ丸ナリ 春ナリ林ナリるナリ不ナリ限ナリ信ナリ心ナリをナリいナリくナリ

うナリのナリまナリとナリみナリぬナリ 傍部ナリ尼ナリ公ナリへナリ源ナリをナリとナリくナリ一ナリをナリかナリめナリられ

一 城ナリ在ナリ海ナリしナリめナリすナリなり

かやふも 一もの面白也ナリかナリうナリとナリ火ナリもナリとナリうナリろナリめナリとナリ云ナリ心ナリこ

名がう 沸るをれを名香とりし

牛頭梅檀ゴブツセシダふと云名あはるる

そうい 出家ハせ常をさるし礼参りや

殊勝乃僧都の詞也

れろろろう句

夏と見ゆ人し 夏をけりひわしすると源化也

共の瑞 し女巻よ或夕のふは散ゆ人し女壺の清見なり

抱けりひろし 法師乃詞と見え

のの人 女壺也

人けけと 人しとまらるなり

あしししび 方 ナカレラハロ 色心 ねとあひさ ニキ 何し

ういともるえうし 佐子の事なりしし

あしとれ子こふなりしをい何とあはるるし

なく成湯し 今このまらるる女メも

うれろつあて 漆の危に抱けり

ねのあひありて句 ゆきあつしとひとむとれこそり

妻上れろし

湯こ又モ同 され不ス知おといもせ乃遣りし思ひなりて

辞退シタるてす曲マクと也とつひる付かとの極みと

し 僧都詞也ろとくおあての詞也女をシヨウ後るれ

とらへるをキあかたかりるし 不むたれむなり

つれぬれを うらみのるゝる

まゝよりの おまつすくにこそしくゝまゝ

がや 六の乃初也

山田ひるく 山中乃善心の時也 意氣を思ふへし

三躰三山中一殿 毎枝抄百景泉

縁ありあまる 引お阿弥陀經なりぬり 呼

まゝのり やらき指なり 枕双紙よむふく

乃脇足ウラシマのめりてそなりしうらつる

お目こまきま こけしき沙用をありばんやもとま

まあり ありそまてひの再うくまぬる 枕なりぬれをか

おへー ぐんぐんひつる

法華經 法眞入控眞永不スミカ私シカ必ツ はしきり

くまらあそへるけつてあつてせぬのまぬ日

まらまのち ねとあひとみーしつとかり

まろー 僧徒大くこれ後しとのや

まらやう 源詞 子細ありとねりひぬくとかり

けは吳中おひひけつてとあつて おもはけり

よづりてはまらまのちのまら 尼の目のまのちを

何やてきつるるそとあやーめり

まゝの甲のち 一殿乃枕ありおまきよお太山乃音の神よ

思ひくへぬくとておまき也 考る尼の神心いん

おまらまのち尚不シカ私シカ必ツ はしきり

ひこう 龍宮のゆふ 夕暮さいとくひくしきまの神
子然乃あゆみ 是るりのことけ

あうやう 女網をくするれも使そこれ世事未だ
なまぬり

あつまげなるとも 尼ふは出あ事となり

ひのこし ねさあひをけとらきけけひうと也

仏き ま人の首をならくし照焼之あんとるや

とみちも 源のた探討ねとなくしきうけくまて

尼ふ世事新やとけり

けふけりひけひ 源河討

あつまてれぬとせ申しきくると可むけ

あつれよ 若葉の事也 一の包ゆひ母乃あつくに

源河^{ワカホ}見せんとるある

ひふひるれ 源河^{ワカホ}して又あそるれある

ねま^ミさ海 雲上も母よりとれぬひしとなり

あつまてるといふ あつりくむくむと可切

あやした 尼ふ乃か上や

ひとふけるれ 尼ふのむかへたる

あつまて あつむの辱同をかり

法座三味 止観^{レクシ} 日隆^{ヒコ}あり 常^{ヒツ}約^{ヨク}者^{モノ}座^ザ中^{チウ}約^{ヨク}座^ザ也^ニ約^{ヨク}非^ヒ

天台大師作ト花ニアリ南岳トハナシ 法座三味也とん流ハ南岳

大師他或説する道成能終て六時六根懺悔する法門也

ひこう 能者の如く 又著しいひこうの神
子秋乃おあへてさうりふて

あうやう 女納言とてそれを使ふは世事未だの
なまむり

あうまけなりとも 尼云 何れお事となり
ひのこも ねとあひまけとらきとほひうと也

仏を まへの首尾なりく 照堂とて人とうや
とみちも 源の在御討ねとなくしきうけに

尼云世事新なりとたり
けおなりひけひ 源浄訓

あうまめれねとせしむらんとて可むね

あうれよ 若葉の事也 一の包おひ母乃あうれ

源後尼云とるの事なり

ひようひるれ 源幼して父教あたらぬ事なり

ねずみさぬ 紫上も母なりとれぬひしとなり

あうまそん句 ありとむらとる可む

あやした 尼云乃か上也

いとあけられ 尼云の心の中なりとるなり

あうま ありむの辱国をけり

流花三味 止観 回鏡あり 紫の座中座中座中座中

座中座也 華懺は八甲の座三味也とし流ハ南岳

大師也或説より道或能終て六甲六根懺悔する流門也

10/10/10

三味を梵語に受又正見又正覺佛のさうりぞと

景辨代のりりり

吹海より源山寺の御也

さしと三并 さしよりよ也僧部と入中在之

高野之山よりよさへわしり承流て心ゆもの

ぬろとよはり

名りらぬ 白皮又桑者雲記曰 雜木異者善覆其上録

法蒙、未實離、不穢まらむ時一又かり 花

あきと 花の臨くまわしり記今授外けりさ城ゆ

と庭とみしゆ

廉の 廉と春り書出るり太山乃家なりり

ひまり 僧部坊へ本まうるる

こまん 獲力 和とじすゆ也

すまひのある 幽落て遠とひのゆるあまの調子にあもぬ

あつらなり

くうりきり 異者 切字とつたり

おろうこまき 花菓子籠也

あしけりり 主人二年終るる

まふ小音 源文人回る所らし也 なるその事され

りやとみりり

うしんあの方 ぬもあなるかへりりりりりりりりりり

もむけりあへりりりりりりりりりり

天竺云優曇華二千年一現又別金輪王出之云々

時ありて一たい 前佛部を攝王出世の心をもつてよ
めると源早下れはひよそ仏出世なりて是は人王一

第九云ト花ニアリ

一とを花久を時一現乃心丸山若儒中優曇華と云
わくの言 さうりくさる心殊勝也

足引の山攝戸をまれふありてのむ方る所へし

ととたてまつる 摺鉢

はうとく 聖徳太子也

くだく まふらん少くともありて事 不云云々

あんがうド

百洲國より金剛子れわつとるるそ元奥寺資財帳

才十九ぶ多邊子金剛子は未百洲國より無獻也云々

但聖徳太子數珠乃縁をいまこん出へゆらとさともあり

ゆへくとりささるるもを他事よりひかきり為の

る也 花 法隆寺太子寶物中念珠を定はち乃縁起

よのあつとさるる

はうがく

ときくると袋 万ふとらと袋とよれんもをさかりんへし

又善徳也 河ニ委

佛業 法おやとの阿分たよりある所乃独館法業取僧部

時宣ふよりぬびるや

ふさやう 法うり乃僧かりるる

天竺云優曇華三千年一現受別金輪王出之云々

時ありて一たい 前佛部を極王出世の心をもつてよ
めると源早下れはひまを仏出世の心をもつてよ
たいとを花久を時一現乃心丸山若儒中優曇華と云
おく山の云 さういふことなる心殊勝也

足引の山搦戸をまれふありてのむ方る所へし

とくたてまつる 摺銘

はうとく 聖徳太子也

くだく まふらん少くともありたる事 不念云々

おんがうと

百湖國より金剛子れわくともいふるそ元興寺資財帳

才十九ぶ多邊子金剛子は未百湖國より無獻也云々

但聖徳太子數珠乃縁をいふこと出づゆらとともあり

ゆへくともいふことあるもともは事しゆひかきりあるの

る也 花 法隆寺太子寶物中念珠を定はる乃縁起

よのあつことある

はうがく

ときくると袋 万ふとらと袋とよはるもとききりつへし

又書抄也 河ニ委し

佛業 法おやとの阿分たよりある所乃独銘法業取信教

阿宣およりぬびりや

おふやう 法うり乃傳かるとる

みぎさきやう

田久幸一 二女とも ふとせふとせふ

さるん 尼とも 僧部を同じ也

夕月くれき 尼へ此源乃は言也別のうおみーとん

あつりーあつり

海こともやき 花のあつりま源此はきーまごみしとや

大いこ花のうへに乃まよめさや 呼 花よまやとらひ

あふり海こともあつりまとまりあつりまとみんとあの上

けりりりるるー

おすそ とりもけりるるるあつり

年の悉 以中乃乃辨よとんや

とよのちれ 山寺りたーりあり

可流良乃天良乃末江名也世与良乃天良乃尔之奈

苗也江乃波井尔之良太万之津久也之良太末之津久也

催馬堂下略葛味

僧部きんそ琴ハ禁也とてハ邪氣ト云わたり物此氣也

もあふと云あつりありあつり けよ森

山のきんとも 靴巴靴を舞馬舞向角躍而遊矣列子莊子

時代の人がり

日乃とやの末の世も 梅玉出世の事とてんあの上れ

首尾はらへし

その 兵つらとや

あきりかとも 阿國梨 七高山ニ 征伐後天子より科せ

征伐スあくとりけらー びろくま

比叡 比良 伊吹 志賀 金峯 狛降 葛城

さしも 考上さぬてお母さぬともさる

敵も 源直出と内々用意せり

ともぬいつりて 呼 何不計 悉つりお作さん

人子思らさくともぬいつりて 相とー

まれくそ 源種なきく乃討ふりと根治みかり

ともぬなく 夫婦の中に入へまさぬともぬさすとも呼

いのちさすて 命たおひるー 加るお物たすもけのそ

人さすーもさし

おさあつちけさるれよ也 双かりるー

縁もけ 源の心さあぬあさるー也

あてお 白ひとをわさあともさる

ひらさるー 縁也 考上さるよく似て家へるとかり

いさささるー ぬと共さるよき一服也うれよりおさる

いへぬさるー也

中へちりさく どのさるうーいかりるー

おさるあさかまの 心と建ぬてさるにまゝに後か

そおとかり

よのまれ風を 物たさるおさるさるさるさるさるさるさるさる

まのり後乃ー 縁めさるー

ちりびりしてけりみて 嫁駢記よみしよき

野書れけりまやうを能合書或いは落極二重なりまよりの

まてと〜〜〜みて引結て墨をひきてまて落極一重に
て落極二重金かとのやうふけ〜みて同落極とわう〜

切てひねつて〜ひをゆひ墨を引不引きぬ洗や花
あしすま 中央ノカラノ字

四十と申齡ありて申は波中あ〜〜〜ありはひり
とよむるな〜〜〜〜

ゆきてま いらしてま

ありし〜〜せ わらとたり

海に波津と たに母あ〜〜〜

あ〜〜吹あ ちのる乃獨り ま〜ら〜ぬるう〜い〜

う〜あめたうとらきて可憐心のうらぶら〜あてひ
の〜と又うきてひまを橋れ〜人〜り〜ま〜あり

う〜あめたう ま〜乃又乃詞をうけてたり

あ〜ら〜縁と 片をと後 惟光ひなるる〜

けり〜〜〜

けみちりま づら〜のあ〜く〜ら〜〜一字け〜あひま
あ〜のあま ぶら〜ら〜をよふとひ〜〜詞〜た〜あ

ま〜〜見ぬ人〜あ今序乃ひる〜をを新〜うれ〜

あ〜のあま づら〜ら〜人〜あゆ〜ら〜井のあ〜〜あ〜人〜とあま

あ〜のあま

くころめてき くやーくう汲そめくは海をぬく神の
こめあく山の井れあ 祿中歌とてす入きあめまひる
く文甲言小お何てあされなるくわりや心めて可隆元
仍そあされと親をみるくあを源と待とまひくあ
うをあれくいあ

あまのこも 惟是の上中も世同心由とやーきり扱又前
年ーやそましく可隆元尼の痛くそ出京之刻と也まあ
はがり 按察大納言家へなるし

教法不のま 三日月丸之象文へなり
くしく物ーう 源の山門扱とあふるる

王命ぬ 教民之儀命ぬとき 源氏乃姓とあつぬ同

是王氏と呼也姓とあつぬを別名成し

いーしたけり 密通取書どとり双書扱れさうひかり

まものさまー い詞とてま人もあひあふる

ひうめといみーまあー 源心なる

あまのまれのあ くのあつあーあひあつあつあつあ

ひかーあもさあ 今さーうよまのあをああひ

あまのまれのあ くのあつあーあひあつあつあ

かんとのあ 玉さりのあをあつあつあつあ

あまのまれのあ くのあつあーあひあつあつあ

小者も非と也 系極中納言道殿殿志 こいひふ

くーあれぬーあまのあつあつあつあ

建曆三二月内裏御尋三首之内

定家

花よりきぬくくちれおと根ほくこのなの春の夜の
くくや 時ふたつとちあけり

秋の夜月のをしあのをれをくくちれおとあえぬ
へらるる きのくく死ひほりなりへし

みても又あ あひこてもまきましくもくあやかなれ
あ中よきくうせたまきとまき

とまき 面白かりるる 源をあれみてあまのあや
せうくまよき 後よなりてあまのなほく成てもまき
らんとや面白^ま向^まもや ちたあがりともあまの
くくくくくくくくくく

たき孫子 上東門院 一条院^あ崩^た後

毎くも今ハ

るま孫のあなりてりくくくく又いみるあま

たき孫をたき心也

又のるる 源はまつくひのあれ事よと西門乃
こるくくくくくくくくくくくくくく

人志^まま 源^まま^まも^まま^まへし

み月 三月月れ甲不用三月めふくくくくくくくく
あまき 教のあまくくく

人を 源とあまき

源光^まの^ま年 王命婦あめのをやうれ人の子を年とい

ありめ乃やうの年 甲不用三月めふくくく

うらもん 江州の懐妊と見ゆる新とと巻きや
つゝめと双なり

申おきも 天子れ又に成行をんこし成めしすなり
それちうしたのひめ 源氏の神子とて人乃神子と
ついたるをよむるや

は夏のふまき 丁圓の松をみりの十八支りて三ふ
成江滝の又々の葉とみりて又藤目といわんふ
つゝのことくなり

まよおか 入るしやうかやま
又が 煮肉へさるる人
くまにらむ 西門 煮壺ののとなり

みあうひを 謝遠成らゆへや

ま—に海さる 思ふん今とわのり
いふさる物おのひまれ

月乃お—さる 思ふん今とわのり
一田もれく 惟光私よとひたれ—

やとひら—けみ じさくや—るを教げらる—
ゆくらさう かつもろ—むも—らぬ極る—
ととなり

けふこのおを 源もたうひけらぬ海もたぬを叫
つねよ 源種やうひるん事—お建たせうちあも細く
まれとなり

ゆとちのたれも 人徳るれときこそはなまはち申さず也
これ急な子 名も成を源へ見え入度事一はまじともむ
きこしおさあひがとくになり

あの世乃 前世の善縁シヨケンなり也

うくしう 尼ひりし源氏人徳くしるのよそをば夕顔乃
と回心教と云むるなり

つと 源氏人徳くしるのよそをば夕顔乃
悪くしと思はれてはねなり

ししいたえき 一日をまのぬもつふたはひりついでよ
よもいふとよと流るるは世上のあつひるのたつを世
のるのたつしはつむさぢ也いぬひえなりぬを自

由からぬと云む也いなりぬむ成し

おき一人よや 路はあつ棚なりと舟あはつなりおき
人なりやあつなり

とくせ流るるを 尼ひもあつなりとあつなり
又山寺なり 後世分とあつなり

秋乃夕をまうて 後世成るなり
春男 秋女とまて地ねのよとなり

まじりてあつなり 尼ひのあつなりとあつなり
あつなりとあつなり

てよつていふなり しのあつなりとあつなり
りのよつなりとあつなり 教壺のゆりなりとあつなり

紫乃一かゆ人にむきくはく菓をとりけりてあそびみる
是より紫上とも名付たり

十月 朱雀院を後院也天子脱履乃故此所を雨をとり

三条朱雀院ト花ニアリ

一町子造られし也地長所なりハ多

事なるる一末摘を撰登双也紫衣ハけ巻乃中

末摘の中とふあつて人し

海ゆらじ ぬんと云人ありカクシ也系人ともてれ事や

乃らぬる月 九月廿日也

せりんのなる里 僧部詞殊勝なり

こころを雨 文衣乃るりる也

ちこなりぬ 十はしりり 感ぬくも也

申せる所 一向れをなひのふ別あつるのよてハ人ナリ

酒也何しこへもまこ申をなるとり人

あまこ 兵戸のいじとめ今乃小方殿小女一人於泉院の

女所又一人舞黒乃大御室イサツ外系イサツのせきとたり

色ぬひぬも 尼乙なり

のりれ 白ぬり不立也今春とる也

けくこゆふらん くりの色一さこゆらむのさきそを

たよんけくみゆあうとたり

あしきの乃ち 紫上を声あうよたり 定家源氏一教

中れぬ所あそび入る也 新勅撰 あしきの

紫乃一かゆ人にむき一れく菓をとりけり一菓をそみる
是より紫上とも名付たり

十月 米雀院を後院也天子脱履乃及此所在雨をいつり

二条米雀院より四町子造られし也延長河守よりハ多

津門を米雀院と申しゆり米雀院行幸を以て系が乃行幸

事なるを一末摘を撰登双也系をハけ巻乃中

末摘の中とふあつて人し

海ゆらじ ぬんと云人ありカクシ也系人と云てこれ事や

乃らぬる月 九月廿日也

せ帯んのなる里 僧部詞殊勝なり

こころを雨 文衣乃るりる也

ちこなりぬ 十はしりり一感ぬくも也

申せる所 一向れをなひのふ別あつるのよてハ人より

酒也何しこへもまこ申をなるとり人

あまこ 兵戸のいじとめ今乃小方殿小女一人於泉院の

女所又一人髯黒乃大御室イサツ外系イサツのせをとりり

色ぬひぬも 尼乙なり

のりれ 白ぬいふまを今春とる也

けくこゆふらん くりの色一さこゆらむのさそを

たよんけくみゆあうとなり

あしきの乃ち 紫上を声あつりよあり 定家源氏一教

申れぬ所あもは入る也 新勅撰 あしきの

二条米雀院

れきよする白波の——しれきよと我思ふ——

めさばし——新野新野の海国——し——

ふ波のき 波と標おはし——ふりおきと書ふ——

てまらむも——す——たひのし——

や虫波を舞也

日里るれき いまける事——とらひり

ふるさあらん 人——新野新野の事——

なそあもらんを扱れ

あくと引く魚てふし——りりかゆらるる

此事なるを——新野新野の事—— 伊の歌

まとあり奥へ——新野新野の事——

あうい——新野新野の事——

ふ——新野新野の事——

ふ——新野新野の事——

り——新野新野の事——

はり——新野新野の事——

きり——新野新野の事——

そくろさむけお 力乃毛——

うとへけりやと ——

この日十九日 十一月上旬新野新野の事——

文由速く 後津所らんとなり

早れりれ 又——新野新野の事——

つもと也 夢のうらうらなうやゆを源氏と回遊せん
しなまきし源之結句とくうんとうち

海と乃 ぶ突の葉までと親家と思ゆ人

いさ一のひて けけ袖種乃切さりの書らむむむ一さの
へさまれさ面白る

おがらちの文 影成る一妹の門くひとのびり

猿丸大夫葉お云あひたねる女の家れま人をわいれと
てま枝結ひてへらまきり 妹の門けりおのひてま

びすふ風吹とくれあらん目まきり

さりの魚り 二反内休ねくこるり

まともりさ 色うらふ草のやあーをあまうー能にとひ

婦人とけり 逢やもけりのままれ強うーや家ゆく

は撰 女のをまよぬるをけりうー門くあまきりなれ

魚捕 枝の枝れ葉のとうー乃佳一まをぬれとあけ

ぬ袖あそありきり

うら一

りふううおつうさうままこれ枝の枝乃葉のとうー

あまをるーやま

とのへ 二条院をる

おめ一のるけり 葉上や 秋もまうーたうはり

けり妹の神名海をくおまかゆらり

まひけり 後おま葉けり 縁をる

所そをあへて

あつしを 危ふしつゝひうりるるゝゝゝ

うゝこみ 共へ 芸をわゝるゝ人となつゝゝゝゝゝゝゝ

ゆるあゝゝゝ

人もあゝゝ 凡ふをせよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うらむるあゝも まゝ母も町かゝゝゝゝゝゝゝゝ

女曲キョクねもゝんじや

かゝり 女納言詞なり

めゝあまゝゝゝゝ

あちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ 源乃好々めだゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ 惟ニシツ之何とらゝゝゝゝゝゝゝゝ

とばくゝゝゝ 惟ニシツ之も又不ニシツ雷也

れゝゝゝゝ 所くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あつゝゝゝゝゝゝゝゝ 和琴スガキ小カタカキ指カタカキ片カタカキ指カタカキとて 神系カミ俊馬トシマ樂ガク

用ろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝ 又ニシツ第ニシツ中ニシツも 毎マイ曲ガク終ハシりゝゝゝゝゝゝ

一ニシツ彈ウタ指サシ尺シヤク也ニシツ 未ミ分ク明メイと云ニシツゝゝゝ 樂ガク終ハシて 絶ツク線センと云ニシツ

らゝゝゝゝゝゝ 笛フエをニシツ吹フクゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひららゝゝゝゝゝゝ ひとらゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちと書ニシツせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とうたひらふ 丁雪 新注家あまこ

のどきとい 新とらんもくといとたり

車れあうろく ちびろくまほくろくあつふ事と惟芝と

へり建とすつ移めまくとは終也

よふん ち海せとけとまむり

妻上へはむの車とくろれまうくの終る

すまうのうしとくも 句

人乃ほくふ 少年ふまはくくといつくとは思事

うや

まこいげてん ちろくろくといとまむり

まろくぬ人く 妻上め層前也

相乃たより ち前乃ろをらとわりの也

まこねとろのい 目の覚ぬといなり

ちろく親旁 叔母うきやとまこ 面白詞也

大ゆふ少納云 大ゆふ女層といまこ 呼

大捕死 不^スふ^スぬ 一禰たりといふと 呼

さへま ち新^スい^スなり

をれい^スり^ス け^ス末^スを^スぬ^スい^スま^スく^スぬ^スを^ス今^ス白^スとい^スり^ス

とや^スら^スり^ス

ひふまこをて 控^{ヒツサケ} け^スみ^スあ^スく^ス入^スて^ス也

うそ^スむ^スま^スり^ス うれ^スを^スむ^スは^スと^スや^スろ^スぬ^スい^スま^スく^スぬ^スを^ス今^ス白^スとい^スり^ス

み懐^スえ^ス屏^ス風^スが^スい^スり^スと^スく^ス 志^スを^スや^スめ^スま^スり^スち

何れもくたてくも 惟南家ありし子細てこもいひ
あうこくも 河内中より志のしなり

れも 津敷と可むぬ

れま なが 遠かとのあう孫也

備うもの 客来の對面なり

ゆいけきて 善うけてと云ひなり

たのう 系れ對乃のらとくよらなり

まろ成へし 与同志く人をもめいふまにかと云ひ也

をんかをいやり 源英の男女婚姻賦云 至剛若男

至柔若女云 後相公文粹よあふ賦也

まけおちて よありきりるる

みひま 火文と云を定くよびなり

外祖母服の月と云ケ月のあやあうい相ともと明され

れきてえはふりるる

てなりい句 志打也 田位を赤文 又位を赤文

むき一野と 志く孫もむらりのやうくものことふれぬ

りやさうをけくたのゆ りやうこそま

とあふおもを定

ねきと孫と云 根と寝と也 源氏云 ぬつ平乃ゆり

と思ふと也 業平れ孫よあ類なり

よう孫と け討人の性賦とへく討なり

ひかりを 源乃い也

のいしき... 世に... なる... の... なる... なる...
ゆう... なる... なる... なる... なる...
実方集... なる... なる... なる... なる...
あひ... なる... なる... なる... なる...

ひねなの... なる...

おつ... なる... なる... なる... なる...
さ不便な... なる... なる... なる... なる...
あ... なる...

跡... なる...

のら... なる...

お... なる...

さ... なる...

あ... なる...

あ... なる...

未摘花 花 分再同とりて巻の名とせん

ちりりさめともうにちあけい未摘花とせよされり
同なるばみの未摘をよひひやうようそりそりちとらり
かりともれ花夕氣のまよつてけり冬編のしとよとらり
あつきのまよ三月よかひらういりやいりちひよとらり
よりそりちとらりいもいりあつきのまよりさつきの
とらりちとらり夕氣のまよつてけりちとらり 信明集
町もつ本すまのちとらりちとらり 林わき

此一人の事いん用成し

しり次年此春まて乃事

也

りさけを摘取なり崇陸文

娘志尊乃所さの赤^{アサキ}はたとくへの名るはる

ねりるとも は討むふりさ海く乃心を合めり

玉うつし此^{ホツタン}縁とお似らるる玉取舞の事といふ

とて書出まをあくを^{シニセツ}海雪あうけり也如ろま振るは討

はれともむゆりき間末乃りあひ新まを言は討

研^{シニセツ}研^{シニセツ}あり夕氣のを此次乃心横登のひるや

夕氣卷十六也

末摘花 末摘^{トクサキ}乃^ノ並源^{ナリヒ}十七^{ナナ}之^ノ二月^ニより次年^ニ此^ノ春^ニま^ニて乃^ノ事^ト

あり為^シ世^ノ卷^ノの^ノ茶^ヲより^レける^ニ也

以^テ詞^ヲ卷^ノ名^トと^シり^テ紅^ク花^ヲを^来より^さけ^テ摘^ツ取^リ乃^ハ岩^ノ際^ニ也

如^ク志^ノ鼻^ノ乃^ハ山^ノさ^ノの^ノ茶^ヲよ^リた^ト入^レて^ノの^ノ名^ヲを^承る^ニ也

わ^りる^ニも^ハ け^レ詞^ハ心^ヲふ^り一^ニさ^ニ海^ノく^ニ乃^ハ心^ヲを^合め^り

玉^ノつ^つ此^ハ殺^シ端^トとお^似ら^しま^る玉^ノ取^ノ鼻^ノの^ノ事^トい^はれ^り

と^シ書^キ出^すと^あく^ニを^海雪^ヲあ^らけ^り也^ハ如^クろ^ろを^接る^ハ詞^ハ

が^れとも^ハ心^ヲゆ^りき^間末^乃り^多あ^らひ^取ま^らな^らば^詞ハ

詞^ハ研^らり^夕秋^ノの^ノを^此次^乃ハ^横堅^ノの^ノ心^ヲも^り也

夕^ノ風^ノ卷^ノ十^六之^ノ也

末摘花
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源
乃并源

あうとくわー 束捕に辱めてめろふも夕歌子似し
もやとのむかり

あうとくわー 夢上をくけらうふ所りさえる死なり
六所^三息所^{ヤスヒコロ}なやなりし

あうとくわー さふ 拙司馬相如^{イロム}以^ヲ琴心^{カクシ}拙卓^{クダラ}文^{クダラ}意^{クダラ}
是を^{オモイマシ}お女の妻とせしむる心也

はいとむをわうそふ心也 我と拙^{イロム}といふを今日^{ケノイ}の
たま^{カサヒ}く合^{カサヒ}我^{カサヒ}せんとも心同し

らうとあけしん 掃木の拙^{イロム}程よりわぬーめさなり
束乃るし書出さんためなるるー ぶらま^{イロム}海^{イロム}み又も

るま^{イロム}必^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}人^{イロム}ーし^{イロム}人^{イロム}お^{イロム}く^{イロム}く^{イロム}ぬ^{イロム}世^{イロム}ら^{イロム}ー^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}く^{イロム}そ
ゆへつきて ゆへとあは接乃心也

さくもさく きさ子^{イロム}ゆもあ^{イロム}さ^{イロム}ま^{イロム}ー^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}ー^{イロム}め^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}
め^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}ー^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}ー^{イロム}め^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}ー

つれかう 源へなひしすー^{イロム}あ^{イロム}は^{イロム}を^{イロム}風^{イロム}流^{イロム}を^{イロム}と^{イロム}く^{イロム}わ^{イロム}く^{イロム}さ^{イロム}
ゆも又ひ 束さるひささくかやー^{イロム}と^{イロム}拙^{イロム}の^{イロム}程^{イロム}ら^{イロム}ひ^{イロム}ま^{イロム}さ^{イロム}

もあは也 霞^{カサヒ}ツカ^{イロム}ル
り^{イロム}と^{イロム}れ^{イロム}れ^{イロム}く^{イロム}也^{イロム} 直^{ナカ}平^{イロム}人^{イロム}へ^{イロム}な^{イロム}ひ^{イロム}ま^{イロム}さ^{イロム}ら^{イロム}ぬ^{イロム}ー^{イロム}な^{イロム}り

比^{イロム}判^{イロム}も^{イロム}也^{イロム}の^{イロム}程^{イロム}ひ^{イロム}さ^{イロム}ー^{イロム}ほ^{イロム}る^{イロム}ゆ^{イロム}て^{イロム}双^{イロム}比^{イロム}と^{イロム}可^{イロム}算^{イロム}
大^{イロム}の^{イロム}さ^{イロム}こ^{イロム}と^{イロム} 好^{イロム}ま^{イロム}れ^{イロム}拙^{イロム}と^{イロム}あ^{イロム}く^{イロム}程^{イロム}も^{イロム}拙^{イロム}端^{イロム}なり

た束^{イロム}門^{イロム} あ^{イロム}く^{イロム}も^{イロム}の^{イロム}め^{イロム}は^{イロム}く^{イロム} 大^{イロム}部^{イロム}の^{イロム}程^{イロム}の^{イロム}ま^{イロム}れ^{イロム}次^{イロム}也^{イロム}
わ^{イロム}の^{イロム}ん^{イロム}と^{イロム}さ^{イロム}り^{イロム} 玉^{イロム}線^{イロム}也^{イロム} 河^{イロム}は^{イロム}香^{イロム}

我の系も花々々の系も花人がわわのれとてなり
は種 枯凡の味つてもは種は種のもふあひまをいしてなり
中勢 かくをのみれ花じりまのこく一基ううとてなりとて
の槍よりううてかりなり

舟をりくせん 母後別仁嫁すらるる 前乃ねとこそ

五郎の共ア大補し金てまうあふむむめかたうア

さひにちのりこ 芝考天皇承和五年恒為院太宰守

貞純親五代ゆこ元忠くく酒也 見

共ア大補ひこちのまへ来たよりま也 時

ゆうさうこそ なるんぞくれらるるこもとりひか

とつひーこくれぬなり

ひろめ 潜 ひうう也 ともひひなる所なり

らへん されよとあうま

きんご 若御はりのを種なり

三乃友 忍詩酒

つたーとさ 酒事也 白氏文集小窓之友

今日如窓下自何所為

欣哉詩之友 三友若為詩琴罷轍茶酒 酒器轍以詩之

友遙相引循環を己の二弾中 一詠暢甲支於恐中

互向以醉伴逢之 今一とさハ酒と可也

てつひ 大うこまのーとなり

あまれさる 琴代秘をさく志人乃あるあふひのらう

はらとてーとさすくへふ 仙牙弾琴 鍾子期と高

りし志さ 百歳よりゆふ人乃す抱をいひくさく候

好ひびうーめよすも也源河とら支那とんと下ふ

つひとり 命ぬりひなり

命ぬりしるれ 花其アお補う在唐ののれとの好
いふより喜の命ぬりたりよまし母

すらくしるは 上より将ともしてせん

ひり種 大明これしきものあり

花きにあり 不及引

見

これひのせ中一は路と一や

れ人の暮らんせり

いさむのやうふを

ほくふくひり

と素人と花びらちと好まぬあ

れくれとておやも給ひり

こし人の 命ぬ好父弟一カして吳んや

めときぬすられた 柳衣 柳衣くちるうのよまぬなり

ためん事一このひな一太妻

大敵乃麻 柳衣を盛む

あるを

比ふぬまきとと

めりけき大妻のりるを

二字どうめを 源朝政大肉乃

守儀茂士とて三位をたきみ一ち大肉山のや海より

さきよめり ひとひの月もあらぬ月れん

むし物れよも花うかのかの... 是れは... 守儀茂士... 源朝政... 大敵乃麻... 柳衣... 命ぬ好父弟... めときぬすられた... くれとておやも給ひり... けくふくひり... と素人と花びらちと好まぬあ... まふもあまふもあまふもあ

すらしる家 上より將ともしてせんとすまはるる
ひり相持 大町これしとまのりあり

うらみのや一町けり 花きりあり 不汲引
可一人たりねきりて可也

うらみののこそ 大町これしとまのりあり
海らむや 今帰りのへまれ人の真らんとりあり
ひしひしがあもよう 句 くらむのやうあを句
おりのとも 句

あめのせ 未へ思ひとほく人よこりり
うらむめお 近門乃源を素人とにねてちと好まもあ
れくれととてふやとねおりり

くし人の 命ぬ好父弟一カして是なりやとるる

うらむめすうた 柘衣 柘衣とてはるるのよまはるなり

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

日本紀大内と 内裏乃二字とあり 源朝政大内乃

守儀茂士とて三位とあり 源朝政大内乃

うらむめすも 柘衣ありためん事うらむのひな一太妻

ゆゑのぬき 徳人月をこみり抱されとも入在るまを
を不身とのともなり

かう志はひ 双中し討也

すいふんぢうぢう 壬午乃忠孝を和泉大御定國臣力也

大和掬経

定國 又時平之聲也 又ひへ扱文て後世の時平のふ

て海を舟のりて酔てゆくまなくもの一 終く世行と

とおころを討ひてらるゝ一 け終ひて流うと血氣

はあーるをけりつとた今たけり乃りこれおとちりまう

ひさまつとてあせううこいやー 鶴のわんせら抱れ

戦のうんと扱をいもまふとゆゑおとせとるこの終

とや 扱られれとつと扱られたつと扱ひてそ

の終一よた母ふきまきりあうひ終て大御も掬りのあ

た巻をろく終りつと打としるま 一よる扱とひんま

扱文をわきとこなくへ後世とやーつとま也

可のあつと 夕方の女むらうつれ事なり

いふ死あう 也報よ也 兼は心回

わまをそ 一 たもふれと也

いふくもやう 禁中くうり乃やうみなり

申いのき 菱上女屠衣也

あつら 源と双中となり

あつまーとふ まくくあひ乃前うとてそとあ

らまーあぢおひひー物をせ人のにこそせしめられ
なとせんと人思ひし物をせむたのふ人^{中後}と
とのひたつるー又こも物てまうー也

あの志 源也

こたつたまうー 双也

おほほろほく せーり^中のひるはーし

ふあうーはうふとふのりーいりうり

り

これよんいり 花はは信氏のん句
人よーりり 花中わのく信氏のいふんじよまわい
はくとのれとこやほのよとねとそふりてのれちと
いで中わふてい人よーりてほのまもるりうとほくく
かりう

心事みんよおがさる間ころ事
ひのしたうもみるさうもあう

ひうこえー也

人わえーしりり 源乃信事とやんおひーをうなると

とふ 中おあうらうと

をを ぬりうねおさねとも歌中のおひひうのれくう

ふり又ま実るー思を成へし

のうたさけるれをせするまふなり

しとおおねさ 又中討多つひよーまはまひうんとる

とせ乃ひと 源え事るれとも中およりひとーまてさて

念うーあうんとれりーめを成るー

みーのな 源さるみーくさあうぬを ねや兄弟なと

人の心のとやうら花人の心と女の人とまおは
うはるて男のわやまちはるあうのあうらう
これいちこのしとらうとのれ

の事なやまうー人よーらうく

をうーやみこはひとまはうそ可松うーんとなり

ひやとーしんとまおあうらう してわうさなうり

らまーあちおひひー物をいせ人のにきそをくれ
かききんと人思ひし物をいせ人のか人の中^{ナカ}終て
とのひなるるー又こも物てまうー也

あゝの悪 源也

こたこたをー 双也

おほほろほく せうり中一のひるあし

あゝくこれ 以中詞なり

ゆさみんとしも 源を地事みんあおさる同の事

もほーとやあのかのひのたうもみるもあし

びうこーや

人わあしなり 源乃地事とやあおひーをうなるこ

ちよ 中おあゝるる

あを ぬりうれおさねとも歌中のおひうのぬくう

ふり又まゝるー思を成へし

のうたさけるれをさるるまゝなり

ことあおあさ 以中詞多しひすもまはまひうんとさる

とや乃ひと 源え事るれとも中およひひとせしとあ

念うーあゝんとれりーぬを成るー

みーうゑ 源をひみーあゝさあゝぬを ねや兄弟なと

ありりるーして何の中^{ナカ}終の事なやまうー人よとらう

もあゝやみこほひとまはうも可あうーんとなり

ひやとらうーんとまおあゝるる してやうさるる

Handwritten notes at the top of the left page.

Handwritten notes at the top of the right page.

とれくはしめいとひり 妹の門せむの門むさの
なと我ゆつこひちのさうくぬもあしうこして田れ
とあなをこもつこもいりもせむとまららんよれたあ
惟馬サイハラ妹の門
はなびけみ ぬいさむとまもいりはなをよとやうと
らうくさう けいめりさけしこまをたんと源思る也

りしくちさ花合ぬらむ宛そそそらりしんさうい
る人らうととらしたまわこりしんかまら
まののちと花又かのやよゆとて
人ー建ぬ 教つやゆするも
まぬこ 又糸家じらる
りのるゆやうう 源続つれなれとるも
中るーけいせり

てとえさー 也事なまゆんりり
めいさー さらめいさ也
おひさのまり 願いも今をあー一城とるも
あつ絶くうと書てえとり
ねるーひるー 源も佐治なると也
むりー進 ひとさそとーまらる事をうーくの路なり
ねるふある 令ぬ心中也 与同まねしとていした
まぬくせ腹ゆく何ともぬ鐘しく今後梅をり何とあ
くたうこれとひさねて志勢もぬが性ホシキウなり
ととんをそ 咲まうけさる
又まよも 令ゆの又へ也

あむやうやとよらういり花あふやうやいるにりと云初
よらういりあふれくあらんこらうらうらうすり
よらあてけいわむらうすのこよやすしいたれとく

とたなくはらめいとくり 妹の門せなの門の
ねと我ゆうこひらのきらくぬもあつてしと田
さあなるこころもいりやせつとまららんしとれた
ち

僧馬楽妹の門

はなはけみ ぬいさきよのほろよのさしや
らうくさう けめりこれしこまをたんと源思る也
こめりう 不めりなり
つらさやと 為徳乃中よりけり
人いぬぬ ぬつ不ぬるする
まぬい 又糸家なる
りのるゆやう 源つれなれとる

てとえうー 世事なまゆり
めくやー さらめくひや
おひさしきり 願いも今をありて
あつたうと書てえたり
おろーひー 源も伝はるる也
ひりー進 心いさしとよとる事ありての
おろふある 念ぬ心中也 与同まほしと
とぬくせ成ゆ人何となく相鐘して今後
くたうこれとひさして志すねが性
ととんをて 嘆まうけり
よきよめ 命の又へ

も月よりあつたて 下ありこめさるる一はり
得れり月のあつたれさつら

みだれら 金風流るあむらり

あつらさあがり 句

うまことあ人も 上藤の事なり

りくまあえて 五巻さうして得れ討けりあつたあ

らしとあるま

二言 ちんてんれ二回也新榜なりとくあつたあなり

あうーれん外て ひとつひあつたあ

あつたあひ 未摘のなめを何ともあきとせせらあつたあ

らひとすうかり

あれ 霞 未摘のくーあ也

えむのま 棟梅檀拵紫皮春節の香あつたあ又窓衣香

あつたあ付とあひ也 ずんて薫物とあつたあ

くくうらひさ 童の鏡せえとあつたあ物あつたあ

くくとあつたああつたああつたああつたああつたあ

て後油りあつたああつたああつたああつたあ

樓連と書てあつたああつたああつたああつたあ

のあつたああつたああつたああつたああつたあ

らあつたああつたああつたああつたああつたあ

とあつたああつたああつたああつたああつたあ

あつたああつたああつたああつたああつたあ

退位壇場之所訃言 至山仁天皇卷 乙一海比町を

を退をよめりぬたまひと云ひ也物もつしよりてはを
あはたまひよしく度海ひぬん物おひひそともやま
経よびたしんしやととやめひの時をせめておふ
つひうとつ一言ごまのまともありおまもやまま
用家おひ稱統やめひ進交けやよまのしんしんの指
すまごま一海とむねてきまれ首有理とあめらぬ
なまうひけきての時を統統可統ぬ のたふひのまて
よう一まそのの子伊ひそつらとと一言感ともの
あひてまてよめととま

玉祥 しくりしねままもむさつひいんくおふうまの

わーれおたすまなる かのりまとも理うけける
このけまのま ちまふの統統くと云れよりて統統と
とらめん事とよめらとちひらをいをとちてもの
いまぬとつへと統つきて相不事と八禱なや乃禱
殿の時證義若の統とつくと感儀時誓と打なまを後
禱儀とやひらやまむも通すらぬ
仍とつた然あててうきて禱儀乃證義若の禱乃事と
よくらめまのめつらつをあやるれいぬるややとあ
もめはいのつとなり
あまるとま 又乃統よりりや源の思なるを
ゆわつら うれとあまのめつとあつとなり

抄い人もまつむらあまつひのいこのとより女房
をといこれよりのもれもつたむもまらまとい
まむいとい

いふぬぢも舞 ひと下り水乃玉にうるいにて思
ろりろりまきわら

琵琶引之別^{コトニ}去^リ幽然^{アノコシ}暗恨^シせば時^{キハ}至^{レリ}勝^ル声

わりのこころお 末摘思人のあはるやと^{シカカヒ}難^カ人^ト
をときこ

さねじも 末摘^{スエツク}不用^ニさと思へ

思ふふれぬ 六条^{ムサシ}の恩^ニ前^ニ登^リ上^ニ又^モ末摘^{スエツク}めわらうりの

らぬとなり

ちの 大襲^{オホニ}より退^キ出^ルのあくとる

朱雀院 為^シ覚^ス巻^キるあつまり

ひるけりんと 回車也

りさなるとり 西よりしてわたり 東より命^{イノチ}姻^{イノ}と

といひたりる

夕雲の身 ともくききき女^メ老^シうたるとなり

ト乃心まむさくやしても運^ウせむ死^シ女^メ老^シの神^{カミ}も

まはる ぬきとや 引^キきまゐる一^{ヒト}末^{スエ}敷^キ

くれぬぬの身 かのめおぬもたきり

まのつくれ 紫^{ムラサキ}の棧^イ灰^{ハイ}ま^ま深^コる也

中央 伏見院殿よりくれうくまきり

末^{スエ}行^クくうことなり

あつまるのめくや那乃^{ナノ}通^ツ種^ムをまめくや一^{ヒト}あつまる

詞^{コト}始^ハ也 不^レ引^クせ死^シ 為人^{トシテ}あつまる可^シ也

あつまるのめくや那乃通種をまめくや一あつまる
詞始也 不引せ死 為人あつまる可也

ひのきさ 束揃へれ心そのまじひつられて巻上へ也

お母ひかりさ 大いさ 大筆築

今の世れりも大なるひかりさの音をさしよや 呼

尺八も笛も一尺八寸お竹を切らう拍きまじし樂器用之

大こそいへ 礼記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂 延喜四年

三月廿四日賀藤原大后内平公御令雅大鼓階前自

必堂下より事也但寛弘

馬六番之時皇上前打大鼓

松云花多二平、寛治六年五月廿五日
こ上ハ坊川院

時置堂上也 氣

ぬもぬれぬ人 力をぬすびまうまじ秘書一入の始也

ひよこくもくは令婦の心にく死様まじをのんと思ひ

一を源これかめまかり

いと海なきけらうや 源詞也

うろさん 毛詩ようさんとうろさんとまてんお後り

青表紙よりうろあんとなり

中ノ家息毛箱まであろあんともいじ

つ連もうら志んはく 源の片なり 意の中よりり之

む播の抄かをとう我もれうと思へらるれ

うらられぬふぬよまひややお持也 玉うつり乃巻け

あうんまうふりこれらまきまのいと同心也久生翁

先可後河直哉よしひま忠治と可むおとがり

あのぬりうき 球系也

三三三
ひのまき 束摘へれ心^レのまきとひつされて巻上へ也
お母ひりりき 大々也 大筆^{ヒキキ}集

今乃世れりも大なるひりりきりきりきりしりや 嘩
尺八^{ハチ}之笛も一尺八寸お竹を切りて拍^{ウチ}きりて樂^{ガク}器^キ用^{ユウ}之
たこそゆへ 礼記^{レキキ}目録^{メロク}鼓^コ在^ス庭^{テイ}琴瑟^{キンセツ}在^ス堂^{ドウ} 延喜^{エンキ}四年

三月廿四日^{ミヅノツキヨシノナカニヨリ}覽^ミ藤^{フジ}樂^{ガク}方^{カタ}大^{オホ}尺^{シチ}寸^{セン}平^{ヘイ}一^{ヒト}尺^{シチ}寸^{セン}大^{オホ}尺^{シチ}寸^{セン}階^{カエ}前^{マエ}目^メ
打^{ウチ}之^ノ鼓^コ々々 今事大^{イマニシヤ}鞆^{タヌ}必^{カナラシ}堂^{ドウ}下^ノ事^{ニシ}也^{ナリ}但^{タニ}寛^{カン}弘^{コウ}
又^{マタ}辛^{シン}未^ミ月^{ツキ}十^{トウ}又^{マタ}日^ヒ敷^{シキ}駿^{セン}馬^バ六^{ロク}番^{バン}之^ノ時^{トキ}皇^{スミ}上^ノ自^{ミナ}打^{ウチ}大^{オホ}鞆^{タヌ}打^{ウチ}之^ノ鼓^コ

時^{トキ}屋^ヤ堂^{ドウ}上^ノ也^{ナリ} 亮^{リョウ}
ぬまぬれぬへ 力をぬすじきりきり^ノ秘^ヒ意^イ函^{コウ}の^ノ始^シ也^{ナリ}
ひよこ^{ヒヨコ}もも^{モモ}な^ナは^ハ一^{ヒツ}令^{レイ}婦^フの^ノ心^{ココロ}に^ニ死^シ様^{サマ}も^モを^ヲの^ノん^ノと思^{オモ}ひ

一^{ヒツ}を^ヲ源^{ゲン}れ^レカ^カめ^メま^マナ^ナリ
ひと^{ヒト}海^{ウミ}なき^{ナキ}け^ケと^トう^ウや 源^{ゲン}詞^ジ也^{ナリ}

うろ^{ウロ}さん^{サン} 毛^{モウ}詩^シよ^ヨう^ウさん^{サン}を^ヲう^ウさん^{サン}と^トま^マて^テん^ンお^オ後^ゴり
書^{カキ}表^{ヒラキ}紙^シふ^フう^ウろ^{ウロ}あ^アん^ンと^トあ^アり
中^{ナカ}家^ケ息^{イキ}毛^{モウ}符^フも^モあ^アる^ルあ^アん^ンと^トま^マじ

ゆき^{ユキ}も^モう^ウろ^{ウロ}志^シん^ンは^ハく 源^{ゲン}の^ノ丹^ニり^リり 意^イの中^{ノナカ}う^ウり^リ之^ノ
む^ム掛^ケの^ノ妙^{ミョウ}不^フと^トう^ウ我^ワも^モれ^レう^ウと^ト思^{オモ}へ^ヘら^ラる^ルれ
う^ウら^ラれ^レぬ^ヌあ^アゆ^ユま^マひ^ヒや^ヤお^オ持^ヂ也^{ナリ} 玉^{タマ}う^ウう^ウ乃^ノ卷^{マキ}け

あ^アう^ウ人^{ヒト}あ^アう^ウふ^フの^ノこ^コれ^レも^モも^モも^モふ^フの^ノひ^ヒと^ト思^{オモ}ひ^ヒ也^{ナリ}久^{キウ}生^{シヤウ}齡^{レイ}
先^{マシ}可^カ信^{シン}可^カ宣^{ケン}也^{ナリ}い^イひ^ヒと^ト思^{オモ}ふ^フと^ト可^カむ^ム也^{ナリ}
あ^アの^ノぬ^ヌう^ウき^キ 猥^{レウ}系^{ケイ}也^{ナリ}

後院 せんともなり

その物なり なるの院乃事なり

のさとあ せりたの祿入るぬれりのなり

ののくく び色よりわりの物なりをまて白氏秦中のみ

て書きたり

せせなりは せりたさきとせりある極まり事なり也

ぬちんがさの 善賢菩薩乗は白象鼻如紅蓮華也

ささるー しいりて白きまなり

あしほひて 瘦れほひいりて去心也 骸 莊子にあり

ひさい ともいへ腫む同 ちむなりなり

いさげる所 瘦れ人々乃痛様なり かねりうへま

みゆるなり

のこれめくまき 邪業ぞ 若しひん

あつとまるとま 一髪を海あり可極何

ゆらーら 能く 紅のうも死な也 花よ委

おきよと禁々といりりうもき後も忌用と法なり也

禁々といふすといひるさあす うたー

おきめびりろ成とるま 親王大臣持家打とるま

くろきうらき 樹大ふあるとお樹をま一の人或をあ

おとのまら物やまぬのうへに忌まるとお樹をまら也

すけを次弟およりまら成とめらりすれ くらきと

と禁々れ思とらるなり

つらさのいふね 花江本云昔蕃客参入時重明親王
乗鴨毛車^ト黒貂裘^ト八重見物此間蕃客終^ハハ件
衣一領^ト持来^ト爲^ト重物見^ト八重^ト大^ト軒^ト云^ト

之用する事^ト 避^カ避^カの事^トなり
物遣^ト曰^ト 中^ト交^ト 安^ト子^ト ゆ^トる^ト事^ト

いふぬとさき女お入る播川^ト 魚^ト得^トま^トる^トう^トけ^トる^ト
し^トけ^トる^ト 夏^トは^トれ^トと^ト山^トを^トま^トり^トや^トり^トお^ト建^トて^ト此^トの^トを^ト
ま^トぬ^トき^ト風^トを^トゆ^トを^トう^トん

や^トう^トへ^トよ^ト夏^ト冬^トゆ^トも^トや^ト衰^ト弱^トを^トま^トし^トま^トゆ^トは^ト人^ト若^トま^トり^ト
し^トう^トろ^ト衣^トお^ト務^トめ^トえ^ト う^トり^トれ^トと^トま^トき^トお^トう^トり^トよ^トの^トむ^トなり^ト
こ^トた^トい^トれ^トゆ^トへ^トけ^トま

り^ト建^トて^ト入^トく^トへ^ト而^ト白^ト菜^ト摘^トを^ト中^トへ^トく^トと^トま^トむ^トる^ト也

ぶ^トし^トき^トこ^トも^トん ^ヤ儀^ト武^ト官^ト大^ト政^ト友^ト下^ト司^トか^ト記^トお^トの^トれ^トなり^ト

結^ト政^トと^トま^トり^トり^トし^トて^ト成^トじ^トす^トか^トと^トま^トて^トり^トの^トみ^トも^ト装^ト束^ト長^ト

遊^トが^トや^トも^トぶ^トす^トる^トを^トい^トへ^トる^ト

ぢ^トい^トら^トひ ^れり^トく^トあ^トる^トけ^トり ^まろ^トな^トら^トむ^ト也

い^トの^トり^トよ^トん^トる^トれ ^まい^トし^トて^トお^トも^トの^トま^トを^トま^トり^トや^トり^ト

ら^トを^トあ^トけ^トう^トと^トなり^ト

お^ト目^トさ^トす^ト身 ^よま^トお^トひ^トき^トく^トる^トか^トよ^ト下^トむ^トま^ト束^ト此^ト解^トた^トれ

指^トま^トし^トむ^トま^トり^トれ^トら^トと^ト也 ^いれ^ト花 ^おひ^トあ^トや^トり^トま^トり

う^トら^トに^トさ^トう^トつ^トん^ト水^トの^トう^トも^トの^ト下^トの^ト玉^ト状 ^お忠^ト兼

こ^トひ ^おひ^トを^トお^ト押^トなり^ト

松^トの^ト若^トの^トも ^わし^トと^トひ^トら^トう^トけ^トら^トお^ト似^トて^ト松^トの^ト若^トの^トあ

こ^トの^トな^トら^トと^トる^ト ^ま達^トま^トら^トう^ト新^トぞ^トり

う^トの^ト人^トく ^あぬ^ト敷^トう^トち^トる^トあ^トの^トり^トひ^トし^トし^ト

江
流
の
水
は
清
く
流
れ
て
い
く
と
い
ふ
事
は
古
く
し
か
ら
し
き
事
な
ら
ん
と
い
ふ
事
は
古
く
し
か
ら
し
き
事
な
ら
ん
と
い
ふ
事
は
古
く
し
か
ら
し
き
事
な
ら
ん

うらまのつしきぬ 昔も是用する事 避返ヒケカの事なり

船装フネカサ 如用ニケモノ 難カタん 拾遺シユイ 曰 申ウタガハシ 安ヤス子 ゆゑなり

うらぬとさえぬ入る横川 一 後徳まるる 一 けりし

しける 夏ナツはんと山ヤマききやりのたきもこれのち

まぬきぬをゆやうん

やうへへよ夏冬ゆきや装カサ存ツクさきしき山ヤマは後人ノチノヒト若ニギ志ハシの

しうろ 衣イおぬえ うりたとさきぬふりよのむなり

こたのれゆへはま

つ連ツあへ さへ而ニ白シロ末マ摘ツを中ナカくともまむる事

ぶききもん 儀ギ武ブ官クワン大ダイ政セイ友ユ下ゲ司シかカ記キおとのぬなり

結政ケツセイとてまうりしと成ナむすかとまてりのちも装束セウソク長チカ

遊ユなやともむすまふりへ

ぬいろうい れりくあるけり ましろなるむや

ふのりよんるれ きひ一ヒトかカおとよまのさきうやの

らまあゆうとかり

お目メさす身ミ よまおひきくふもや下シタむき末マ此ココ解トクたれ

指サシまむむきりれしとせ 引ヒキ花ハナ おひあやけさき

うらにえうつん水のころむの下の玉タマ状カタ 好ヨク忠チウ兼ケン

こむ 袖スリーブいもわ神カミなり

松マツの若ワカのち わしむひさうけさるお似ニて松マツの若ワカのあ

くめなるとる事 蓬モウキョフせうし 新タニせり

うのく ぬ敷ヌシうちるぬのひしし

三
四
五
六
七
八
九
十

あふまゝに ぬはかたじけなく

うゝやまのたが 橋はききりひびきと松の音なりとれ
れまゝのまゝに

名もたの末乃 日神を名よる末乃松山の末乃は
のあまぬまうまに

は時れまぬみりやうあうりく松山のはと可憐と
けたる身 子とも縁井不中かたよまひや

すけける 雪中まあうひておまけけたる成る
神くくも 神小大くは也 危き流いゆくと 晴

ありおける身 足る人も源の事也 翁よれくまぬ
らまとなりへし 物神也

わりまりのき わや雪の詩とげーゆへり

白氏秦中吟 幼若形不蔽老者 體之温 寒夜乃神也

いづと以源乃を時分うく 紙書たるなり

泉源極大書 霰雪白紛々 幼若形不蔽 老者體之

温 想端与寒氣 并入鼻中幸 けひをもつて可むけ

天正七八私鼻く云ふは寒のん心と可むけ

ふのははなる 大うこけを源の見持ひても別り

たより可むまとも也 殊勝く

心なきがみ人おまは種これ信なりる

なごころま ぬの上下とりへまひもせあたるもの

蝶乃やさくへはみり

くらねのゆめ 桐壺チリシヤ

ほろつりく ながく申の後の後る

きりう 徳倉ぬよん心のけ路をぬり

何さぬ ちとせ

さうらひ 句 日あり事さうらひをさや 何せんとも

まじれもん 喜びのいとみみみ

みられ國のそ乃あつあきん

檀紙

奥別よりすゑ初いりる

いさよう うきお世にわらわのひさうさうい

年一のさう

うらな乃き りのり我後さつさしういむ志の心のつ

きかきりそ 袂をひくそとあふお打ひくふさそ

と源何うもされいり時ふ夜コロヒユをせい

ひえとめ 今のまごめいりい

神まに 漢書そきふをあかりそ白妙の神さるいん人

もあうなふ

活筆のちりくさるの種 別ヒシののむのうんとがり

まうてさうらせひろく相急うちのこしまい

私筆れ志とれを後書してい

甲一あれいとき 是くも定て志あつせられと思は

侍らんとや末摘とく 結つとあつたのの清むら

今やうさつとゆらと うさくしおまらんせ

あゝ今世の深きり又ゆるし及ふりきとれるゆ
あゝとさういひしきとさうめいひて可成る
おめれとらふおとら表裏回ふ代濃りさういふ
や町敷に装束揃ふるさ知乃重家のゆれとらり
は性寺の曲の裏に愚用とさう今扱乃又 業花相程
おもあらるるるる 花の香

町つりまふとさうよふおらとみてやさこひんおの
末摘のえにりてとさ 心明也

人志連をわらむとらう一おの末摘花れ及よりとらん
二首の給すくー ころあはれ花と

知をまら花とみしとも人をあふらうつたてふ

あゝ わるふとと也

月影おやま 月影なごに末摘鼻とみか思あてすす也
くれお井の音 ひしすう 永 日中記

末乃方人お令ぬ成てよめり

のいなで すいらの 又ぞあへてのむ花
とりおとさんや やりあらるなり

あらわさ 源への内装束れ事らるる

たふとん前 内ら前也只人を不若前花傍園白出入とま
くこや けうとまや 日也 地也

こゝろめの花れ及乃こと ころ光とあり

うゝと書集丸 ころめ乃花のここのらなるもの

せむき一葉のいれむや 秘物束子ヒツモノもや 春日ハルノヒに
 ささる山とくく徐コトにささるれおとくしめ
 まこほ 束子ヒツモノを束ヒツモノにあげり
 山とくく山とくく山とくく山とくく山とくく
 山とくく山とくく山とくく山とくく山とくく
 山とくく山とくく山とくく山とくく山とくく

わすれやうしあつちよひのゆりこのゆり花政事要
 略衛門府風俗云々多々良女の花れ如以祿利好年
 夜滅は系及好年夜もはれこもるり一人の女房の句
 わすれやうしあつちよひのゆりこのゆり花
 鼻のあま一人よたもるこひゆりこのゆり花
 俗多よりかきゆり又たゆり先の花とくく梅のゆり
 俗多よりかきゆり又たゆり先の花とくく梅のゆり
 俗多よりかきゆり又たゆり先の花とくく梅のゆり
 俗多よりかきゆり又たゆり先の花とくく梅のゆり
 俗多よりかきゆり又たゆり先の花とくく梅のゆり

一人と云くお遠見
 中まはし
 行く志を不盡
 ともいふ

あはうりる家 妻も命をたてぬくかくのゆりも云々
 ありの命帰ひこれう孫め 女今もはらふこのう孫め
 とあり二人鼻赤人ハナアカヒ成へしきさうこれ女の詞の
 あしぬ敷をさ 妻も命をたてぬくかくのゆりも云々
 夜をゆくへつめりこれ 心れるさくをまのうへはれ
 ありとくくゆり 女も一人と云く我をみん人
 もみりくやまむじや 花をたて事むくあしぬ
 女へたてりくさねるさくをまのうへはれ
 ひとく 一具 源氏れ用子まねと末へはれ也
 さい深 紫小糸とあり 葡萄深 海より 葡萄字
 山吹の何非らんくさむじやれりめへされむりや

あつゝあひ おぼせし比判するなり

ものふ 祿まゝに書ぬたれを

おとこたうり 正月十日日月乃面白比んを京中一男

めおとこを築て年始祝云の身とてこけりゆ兼て

まをせり取く也又雲おちも若きし例あつり持統乃

河内漢人唐人踏方をなると云と 室今の播るにあ

連けつあしれまゝとよめり 高巾子綿着付布

お空緑もを流下也於委年中仍奉可身 十六日女踏方

七日 白馬 ひるれこふれりるを

礼記春東郊ニムカテ青馬七疋ヲ用トアリ

七一世ラカカ小陽教正月小陽月也白をるれ性又馬を陽イカキ敷き

春又白馬を曳まは年中邪氣を除く云が又あはる

年中行事と可也

生かたり 阿くむの年生るしなり

みのり 首き一回あきて肉へ阿がる也 大裏寝殿

よみぬいよかへあくるといひてき可相遠

脇是くまをりけりるを可相末摘をまへあやけく

山見海梅ぬいにくれけみとなり

ひんくき 源れ水髪乃道也

まをうたへ 鏡意 唐連播上函カランケカケノハコま六やうたい招ゆる

あまー範乃 源より伝来する容せとなり

おもれり 源よりのを黒用丸うりたけりあや

をぬりみすれとも人よきとけくうかのきききに
大和掬種よもあり 仍鼻よへへの付たるやううう
はうそけりみ源を世のねもそれとせうく好気
を思ふせぬふうや平伴のねも思ふ思由の似せ
ぬふなくるま

わんうんき あやううんとがり

わんうんき 海淵とひ急後梅ワライラモトル梅 杜子結

まかりのとりとむむ梅の花をうう我もたりとむ
てかりむま

何のりー 仁和寺川の約章次第八条院の地家所興
使初造階^{ハレカクヲ}とく見吏初玉記^ニ天夢六年今茶南階^{ナンカク}同^{コトナラ}

と二かたての上をぬきうくも成り一^カと云^ク周^{ホウ}章^{シヤウ}と^ト東

松云花と三風章とひーむまうううて有 けえよと葉下^{ハカギヨ}はあうんの

たあなり

知れ文 鼻とけりひびくなり



をぬりみまんとも人よすもけくうかのきき
大和掬種よもあり 仍鼻よへよの付たるやうう
はうもほりお源を雲のねもふれとてうく好
をあせぬふうや平伴のねもふれと思由よ似せ
ゆふなくるま

あへるんを あやううんとたり

わくま 漸用とふ 糸袋掛りうイラモトル梅

杜子符

まかりのとりくまむ梅の花をうく我もたりと
てかりのむま

仁和芥川乃の幸次幸八榮院の地家所興
使初造階^{ハレカク}とく見吏約玉記^ニ天菱六年今榮南階^{ナカ}同^{コシラ}

と二かたてく上をぬまうくも成り一^カ濕^シと云^ク鳳^{ホウ}輦^ニの
の男うりくまへてた乃のえまを棄^シ下^カ流^{キョ}あうんりの
たあなり

知れず 鼻とたのひせなり





源氏物語抄巻第四

目録

七みりの契

花乃えん

あふひ



三
四十七

お茶屋

茶屋と云くまゝに詞巻申すなり 試茶の日は

一しを空乃日やゆうくしうくんとあり花

れ裏の巻子茶乃茶と書り故の裏茶にも茶なり

ひし付くも名成し 孫の茶 高れ茶 茶屋と

昔例を定ぬ乃始と傳和天皇天長二年十一月を放太

上天皇又八之御齡云々四十年又八と云又八四十七

は成りれれるともみしを四十七とをみしと云今年

の齡を親心也山海味を以て酒裏音樂自と云々

奥福寺なりとて所記あり又十族ハ又十也又十を何

よして用き

略之別抄書目

源氏十七支十月より

十八歳七月まで此事あり

崇徳院の御幸 宇多河門内殿小比すくも也崇徳 三条
崇徳小宮崇徳冷泉のつれをばるるの河門乃登り海
を院とつり 承平河門と崇徳とやしてより河一
人にとぞり 女今良花合を多河門乃可成
乃幸 幸一字とてあまもよめり天子乃此を河所小
奉あゆとまむなり

河幸と河院也り 啓^{ひら}文^{ぶん}中^{ちゆう}一^{いつ}文^{ぶん}也

祇宗殿 れま人もく 禁中うて也

多海波 唐築也 後和の河代より始なり

梅^{うめ}庭^{てい} 樂乃名也 多海波^{たうみ}れ^れ席^{せき}也^や行も條あり

花乃こころれ太山也 ころ河の才九よ云

花乃こころれ山木れをうにみくはよと云

太山木も面白むあゆ

急いぢと 藤のうらよ^{つた}乃事なり

河うらひん 仏乃と返りる言妙也

聖主乙中天伽^{あま}護^ご頓^{とん}伽^か祥 代^た華^わ經

或^{ある}在^在卯^{みづ}声^{こゑ}勝^{かち}衆^{しゆう}島^{しま} 妙^{たう}言^{ごん}も^も異^い名^な也^や

天上のより佛世尊のを勝ると又一まのりり

侍とりたれ 踏^{ふみ}乃るる多海波の境ふあるを

たを唐 ちいあふの樂也

東文の母也 廻^{まわ}后

正三位 後より上り成り入り

延喜寺記云 貞親以其妻源氏之叙位例

正四位下位の如階也

ひーれ世 前世也

文を 源氏を退せりや

さまがれ

うらぐの まことあひとを不也

まづ此人乃やうよ 匿怨友其人た並の船亦船

人よりきれ 若上才一見初ゆへに夢夢ひれくくあ

ゆへまればおもたふひりとなり

又い さらしをあくまへる事

清あとも 琴も下ひるい合あり

ほりなら 我むをめと与ふしとふひ者たる

あとなり

まへ雨げひー 政雨家司

あやしと箱う 幼稚なりをこなり

この所はる 祖母れ所宿成る

けさやうふ 源を介懐ひされすんる事

この名 源也

女もそ 共と源れ女乃力も成てそとなり

聲入り 聲小源をみんとをねほきを源を女あてみこ

ややや 女もくれひ雨の候てのをまじり

あそく 源氏の詞也

あそく 一かたなくとも也

あそく 健回

あそくおけいせと 双比とひめて五思ふ也

あそく母くこを 紫上シノ祖母逝去を九月廿日以九十日を

十二月廿日以なりし晦日チヨウ小除服と五日とを

よや 晦 十二月可除衣 花お

又おやもなきておひつて 何相 母老ふくなくはく

うまやーなひよそまーくまるる一のくしなり

まもゆきまよん 約薄又紫とけそよと海もゆきまよと

つらねとつらふるれと 約梅 崩末モトおきそ外梅梅

かこぬあまきぬぬつらふまよあ紫虫服とまけら

そり廻別ハ不用物な連とも除服以後なり用捨きて

まろくくつらふとる也

地チのノあそく 紋モン不ル見ル心シ也

十二月除服と知建ぬ 十八女の年なり

九年又行定法涼殿サロウテン代東庭よ

四位又位シテむるよ神を連て舞踏マカシする也 下シタ署ノ也 中ナカ初ハジメ奉ホウ

奉ホウお振シ踏マカシするあお初ハジメ神と近代謂之

うしき そめく心也 あひりあ方るある

あやらふとて 晦日あり あそくあつらのまよとまよ

あ又昨日あやらふとてこりちうらる

返マカシ催メ 殿上

ていふ花二月一日の小初神とよ初雲のつらふあそく

あましく 源氏の詞也

あましく 一かたなくとも也

あましく 健回

あましくおけふせと 双比とひめて五思ふ也

あましく母くこそ 紫上祖母逝去を九月廿日以九十日を

十二月廿日以なりし 晦日小除服し五日を日とらふ

よや 晴 十二月可流丸 花お

又おやもなきておひつて 河相 母老ふらくとくはく

うまやーなひよそまーくまるる一のくしなり

まもゆき又よん 約薄又紫とけそよと海もゆき又とを

つらねをりあつゑるれと 約梅 崩すお紫を介梅梅

かこぬあ家まぬ改つあつゑよやあ紫虫服をまけらる

そり廻別ハ不用物な連とも除服以後なり用捨てて

まろくく 流ふとらる

地ののたま 紋不身心也

十二月 十二月涂服く知建ぬ 十八女の年なり

朔祥延表又年 徳徳同十九年又行定法涂敷代東庭よ

四位又位むるよ神を連て舞踏する也 下畧之 中初奉

奉おね踏するあお物祥と近代謂之

ろしき そめく心也 あひりあ方るある

あやらふとて 晦日あり あまのあらのまのまをまらる

あ又昨日あやらふとてこりらるる也 追催 殿上

源氏物語の日記

人海殿の方より来て枕入弓葦此まゝに射田目鬼乳を指
持持て又依子とて女人紺の布衣着しりとの空内裏
れ田門を過る所也瘦病氣也 鬼と云を方相氏と云
鬼の名也 雛の一字と鬼やいともあり
金吾除ね追雛名 三條橋

いぬも 犬老也

ひいなの中より源氏と名付たてぬき乃
系由とまひひて又由へ系へせしめていよめさけ也
あまのつくと 双地おとほく城跡ふきとけり
うらりさ 外換りかゝる也
志ぬきとぬ つけるまゝと源ささぬけりておみ

建物は後を又つゝへがやを委めさけくるる
くゝとむかひるる

よとせ 夢を源より田代婦なり

おろしち 芸式は評也 ねとこり成ししを色目前

おろしち ちのちの神話云 世中おろしたつ

たつとけり湯おひのまたり中よりとれ目をを

おろしちひしてたおろし朝日と解祥なりあらんれり

乃とせれりてあふ

今葉背のあふ帯より 形勢 毎天打をぬお

やる帯のぬおまへし ありとせと帯をさすうと云なり

ゆゑに 二三月中にお清涼なり文人をあるて詩を他

藩^{クニ}をくろく事あり自ら上并執柄^{シラヘイ}衣袍^{イロウ}を帯を保えり
信^{シロ}也^ヤ ^{ラマエ} ^{タシロウ} ^{ナリ}

まじさ 参在 南河の系族也

自 桐河門 春之 未雀院 一院 寛平

之帝をまへ海さぬとともぬ何

あの所しれ志すも 所産乃事ナリ

源^{ミツナリ}密^{ミツナリ}五^{ミツナリ}の月所門のナリ三月よりなる也

つれなくして 正月所入をぬ 二月十日よりなる也

力のつらけれ 後撰 伊豫 表ともいふへき人され

之が事をも乃つらくすなり成ぬ事よし

申^{ウケ}ぬの表 表^{ウケ}えはひなりなり

世中乃 表れぬ心なる事へし

うきけいけい 呪^{ヒキ}咀

あしやい 氣の清成法ふ心也

うら—たり 源— 似たまふとなり

所心乃をに カよまづあまもや 口のたぬれうもあはれ

まのほく—のりうきむ乃鬼のみしなり

のりま海みき 子故又海あり中となり

まのれありみられし 源と—なる事思ふ事

あ—く—申ても名のよみうへの心なる也—

見てもれのみき 所子と表をみても秋^{アキ}のくへし 源をみぬ

と秋^{アキ}のよと也 倉^{クラ}掃^{ハル}方 人れ親乃心をやふ

あはら申さひ 藤と源との中なるり
人の物つひり 菘乃沙心申也
念ぬとも 菘のひつひけもぬり
思ひのかる所 念の心申 双る書らる
如月う 菘入内 冷泉院もる
あはらひるまらハ 源と五悪と也
他人も勝る所く 同日密書りしうや
みこたち 足下を乃三源より 對して勅云也
作まの父 比る面白詞とる
うらふむらして かくふむのうけるとなり
物つひり 菘の折也

あはらとたやぬき あはらり双也
見の折る 二条院より源の書るこまなり
よそへけり 源の書る文よりみてはる海なり
新古今 こそへけり 見連とあふむらとまなり
のすへあるて 此の花 恵子女王
菘の折る 我者小海より 松子つり 物とあ
さうのるんうそをてをみん
とてあはら 床を小縁の詞也 ちりなふす人し
とてあはら 床を小縁の詞也 ちりなふす人し
ちりほりりそそとつりとを心けりし
神ぬれり うちまぬぬや早也 けりのでよそとる可

心ぬ けみいそららぬ。

うらゆきと ひと乃ちいほくと志とす神ひり

あされとる 大樹ウキキのりとて並衣とてほらぬうや

うらまきふとれ下ふまら酒也 呼

ありけり 雲上の所也 極子オチシユなるる

ねとらう 源氏のもやへ入ぬらぬをり

ゆれとる 源也

入ぬら残乃 温みてをへぬる残のまされやみらくも

なとふらののたふま

えらめおあやう まさるをさうとまむ成へし

あうのこも中のわうと

筑秦声ニイユルモカテニツクルの世言豪情の定法カケル十二段十二月其ハ以段調

也自一至又大弦フ云自六至十中弦ト云自計イ為イ中をく不

そとと云中のわうと中ト也 平調の時を二七の之

と中乃とハ下を調ふ 一ゆらとふ 花

一れととを身一かうまとま一かうまとせまりてたり

まなつとまらと也中の身一かうまといひよ也細弦ホウ

しり程かうま心也中乃あなのことり人倫類ルや

平調ふとととと筆ヒトナをたけり也 比假時委

ゆい大代まよて及てをさうと残のへる

ゆいあへす 阿んをゆるまことなり

かそろくをりを 箭の曲ユや物壹モノイチ越調コウテウ乃樂也也平調

名玄のこよ調子がとるる調子を久くのそと心算て
可憐な 長保樂 大石系破保者俱世利が利次是
も播磨の心むらるる

一日の詩云一日も不見ぬ三月

く縁くしを

おもれ 沛膳なり

あやうけふ 源又出ぬらんしとるる

あつりー 源ととめいかなとすま可憐人よくそあ

しとたり

あつらけふ ねさけりま心もさるる

源公維乃時意よまし 坂分別あふへ

油をとつゆのゆい

ふまれも こそもあまなり

う縁め 女花人 うねめより花人をうへに建ともめい

書たり 花委 今も花人とて肉裏に頼れを成人か

との女也 瞬

肉肉のまけ 玉縁也い一人乃る 油種中 ねえなり

まけとて一せりてりふを 肉肉のすけれ事さるる

のこ ずけ せうあり

所寄つりー 油けつる役を 肉肉の所へし

みうちまの人 うらまを打りて頼れしと所寄つる役

若くしやうて肉肉と深あふるるー 又奥さるる

藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと
藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと
藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと 藤原のそと

まじりて 黒髪より 志ろのそと まじりて 志ろのそと
まじりて 黒髪より 志ろのそと まじりて 志ろのそと

橋を 津國乃 橋を 津國乃 橋を 津國乃 橋を 津國乃
橋を 津國乃 橋を 津國乃 橋を 津國乃 橋を 津國乃

ふくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ
にくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ にくろぬ

次中 好まへん 好まへん 好まへん 好まへん 好まへん 好まへん
好まへん 好まへん 好まへん 好まへん 好まへん 好まへん

あのと 好む 好む 好む 好む 好む 好む

かきりあり 以より 源を せむり せむり せむり せむり
以より 源を せむり せむり せむり せむり せむり せむり

温的 敷 申れ 室の 東乃 方ふ あり 肉肉 所ま ます 没也
申れ 室の 東乃 方ふ あり 肉肉 所ま ます 没也 申れ 室の 東乃 方ふ あり

うま つけり 山城の あり けり けり けり けり けり けり
山城の あり けり けり けり けり けり けり けり けり

僧馬 樂 呂山 城三 段 つふ せん くの 用よ へ へ へ へ
呂山 城三 段 つふ せん くの 用よ へ へ へ へ へ へ へ へ

せんとり へ ぬ 作の けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

おひとなくさめんとうさめひ感へし此れ何分也 瞬
即く志う 文を 酒内が 十七八乃所る心をはり
まてうさめ感さるるけりり可然也

白氏文集第十

夜や語若者鄂別 鄂別ノ内ニワケム列ス

夜泊鸚鵡洲 江秋月澄徹 隣船 語若

夜泊堪愁絕 秋罷徒以泣 泣声通復咽

為声見其人 多婦類如雪 独倚帆檣立

娉婷十七八 秋淚似玉珠 双 隕的月

惜向谁家嫁 評泣何情切 キウカム

一回 一ちり 然有竟不脱

あひとをば けつまの海やれあまのりあけうさめ我
らぬまのまむりり 又二版 ひもかきもわら
ころそのヤウのしとせとむひてまをまらねやん
作 僅馬系系巻律二後
まのめいさ 肉肉也 うさめなく也 標乃字成へし
我ろくま 源一人の恨 てをわ となり
人作 たきさ ちまやんつま れ末のうたひ 相乃詞
た らり あり 修理 大まの よふと ぎ 討ひて也 月 やを
此 を いつり あま り を 成る はる
人 お ま さ さ ら い ひ ひ お ま ま て り ん き ん も 時 宜 も あり
也 新 か と も ぞ

たゆめを 源をたひやくゆめをせやとぞゆくま

みちのびなるを

まきののりこ 大まのこ也 まけあるなるや

くも乃ゆらまひ わのせうくくえうひなりらうわ

のくも乃ゆらまひうひてをゆ

ゆうし 源をたうたれとなり

こがく

ゆらうく 歌中を肉ゆひのへらえ

けごく けごんせとる

あゝあ 概悉也

まじち 双ゆり年りり

まじち 鳴呼わはうううく成びよや

うらしひ 現ひぬしうと化は成へし高美のこ也

けむらうま 双中名かこらひ乃あうくは濃んりや

ふよふうふも花のこらひりあうとふよふしう 深の衣下よまうんりり

のくれるまき 澄れあうわとつかへらうとふまひ

とふもゆり 咲

うらやまらふ ぬんがうううやむへふ事なる花

けらるる 花連をうらうや 回

根てもつあひき 左のまを縁ぬ人ぬゆひとなり

太刀のひあゆとくともうれおをよます

たゆめを 源をたひやくゆめをせやとぞくする
みちのむらさき

まきののりこ 大まのこ也 まけあるなるや

くも乃ゆめまひ わのせうくくえうひなりらうわ

のくも乃ゆめまひひてまゆも

ゆうし 源をたひたれとなり

こがく

ゆるうく 歌中を肉ゆひのへらえ

けごく けごんせり

あゝあ 我も也

まじち 双中乃年なり

まじち 鳴呼わはつううく成むよ也

うらしむ 現むいしうと化む成へしあまのこ也

けむめらあ 双中乃名かこらひ乃あまのこは濃んじ也

うんじらあま 双中乃深の衣下まきんうんじら

まきんあまうんじら

のくゆるあま 澄れあまうんじらとつたへんじらうやまむ

とよめあま 咲

うらやまあま あまはうううやむいふ事なるは契

なるるや 双中乃あまうや 回

振てもりあひあま まのこはあまあまひなり

太刀のひあまといふともうれみをよます

うおも 流ての後うれ 一^{ヒタタ}流河をまあへハふるまぬ
と思へし

わらわらりー方 磯を以 臥を恨んるなりまへく

次とてをくさるなと也 下をきる肉約の恨と讀み入る肉

一也

もつてするるを切りてする

らり及之記とり人里近代壺

用禁^{キンシヨウ}及之人冬ハ蕪^{スワウ}芳 而堂^{ニウキ}

艾生 四位以下物系儀

あつりふ織とる也 上下略

也端神なりうひくこと也

第ハ中ねのありりり 花睡衣人昔ハ衣衣のふれと帯
用らる今この世も上との御事ハ引をるの切と用はるの
五衣ハ二條式花田と年よりうてををほ衣ハ掌中ね
らを二衣ハの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
二衣ハ二衣ハの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
用官のいふにうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
芳掌中ねの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
らにうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
三衣ハ中ねの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
をの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
二衣ハ中ねの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
るれハ中ねの及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
靴の及ハ中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
を單文ハ四位下地系衣人ハ御事面白き裏深打後夏履芳
五衣ハ二條式花田と年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
五衣ハ二條式花田と年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ねの年よりうてををほ衣ハ掌中ね
トこの用ハ時体とわらわらり

名去抽種なるぬへるや

中さき方 肉約とみとの中級そのことまんと帯とつる

一 流あともを

石川のこまうとふむいとらわらうよくおすらりの

る傍むいう花田れおむの中をさくとも 催馬蟹

東路乃みられもくなる^{ヒタタ}為際帯のうとけりりもあらん

とをわらふ 一こく引合て成てし

悉く一ゆく言 明也

そうししくま 臥中中ねの及殿中へるや養女と

下^ゲと二おれへし

一や世中 中言未定とく世上^{セウ}観しとる計元

うおも 流ての後うくれ一^{テニタ}流河をあらうハふるまぬ
と思へし

わらわら一^テ言 穢を以 臥を恨んるハ^テまへく
以てうをうらなとやうをきる肉肉の恨と^{ヨミ}讀みへる肉
肉も以てうらみと云ひ也

若き 花よ委 装束の多をもいでするを切てする
うや以中下官をれも源乃らり及之記とり人里近代壺
衣代若お下りと福の多を用^{キシヨウ}禁^{シヨウ}之人冬ハ^{スワウ}蕪芳 而堂^{ミカキ}

裏濃打緩 夏蕪芳 草^{トフヒトハ}又生 四位以下ハ^{スワウ}恭儀
冬^{ハタ}躰^{ハタ}躰夏二^{コメ共}藍穀 目とあふくお織とる也 上下略
端神 此の 端神奥神あは也端神りころひしこと也

名去相種なりぬへうや

中さしき^{ウラコキ}肉肉と^{コメ共}以との中級そのことまんと若とるを
一^{ハタ}流あともを

石川のことまうとふおひとらう^{ヒタナ}せうよくおすらりの
る^{ヒタナ}おひう^{ヒタナ}花^{ヒタナ}田^{ヒタナ}れおむの中をさしきも 催馬蠻

東路乃みられもく^{ヒタナ}なる^{ヒタナ}為^{ヒタナ}陰^{ヒタナ}若^{ヒタナ}のうとけりりもあらん
とまおひの^{ヒタナ}う^{ヒタナ}こく^{ヒタナ}引^{ヒタナ}合^{ヒタナ}て^{ヒタナ}成^{ヒタナ}てし

悉く^{ヒタナ}明^{ヒタナ}也
そうし^{ヒタナ}く^{ヒタナ}ま^{ヒタナ} 臥中^{ヒタナ}中^{ヒタナ}おの^{ヒタナ}及^{ヒタナ}殿^{ヒタナ}ゆへうや^{ヒタナ}養^{ヒタナ}文^{ヒタナ}と

下^{ヒタナ}と^{ヒタナ}二^{ヒタナ}お^{ヒタナ}れ^{ヒタナ}し^{ヒタナ}
う^{ヒタナ}や^{ヒタナ}世^{ヒタナ}中^{ヒタナ} 中^{ヒタナ}未^{ヒタナ}定^{ヒタナ}と^{ヒタナ}世^{ヒタナ}上^{ヒタナ}親^{ヒタナ}し^{ヒタナ}く^{ヒタナ}計^{ヒタナ}元

とこの山なる いぬうこ此庚乃出るはいもや川いり
とあふくしてより名りしをが

りひびりふゆ 自約の事やうんとおほきう勢也
なんしとるは 双斗成る一

さりきあえ 去を前をたぐひなり
あのまひとりそ 葵と取と一腋し

うりまてらんまき 双也

七月甲子より成終るる也十月

多タイ皇太后 オレレお温子 セウセン照彦公女 寛平九七女六中女

泰二七女二光孝后 宇多母 寛平九七女六

女よあしとらん人王 りことせおまりも 回

玉のひのり 冷泉也

沸ありのうちも 中文乃の啓キョウもんホウ鳳輦ホウおめさあき事

もあり 又オシ麻糸毛車オシ小糸時オシもるる一ウ依ウなの人

の糞サを依サ葉サ油サのいふ也

伊海抽イ子二条乃長此 まうく春文のい息前とりり

時ト氏ト祿乃修 河よ引カ人王 大魚や小塩カ北山

うゝろを きくろき 花立計と也

河よとせぬ身 心の盛々 名志のい事とりり

冷ふ英き 源のい子まる也

けふりのいぬも 源ありらまてをけやうらうともぬい

町こちうくをわくしとりり 如日月を源也冷とみ沸

雨降の事一なるる

四十一

花裏 巻め 南殿様 喜事也

春 源氏君 十九文

花裏 花はもつて其のなとせり但巻の約は南殿
の傍れ裏せせぬとありてわくの二条のかくの菘の裏
れ而も菘のなをえむとありとありとありとありとあり
名と花の裏とありとありとありとありとありとあり
柄と表りとありとありとありとありとありとあり
の裏とありとありとありとありとありとありとあり
源氏君十九歳官宰相中お正三位

神宗院を花裏の縁之也
南殿花裏のりむ喜時探韻例

延喜十七年延喜四年二月ホ例度例用之五藤系

之例天曆町地下藤人けりりまて雲上乃藤なりて也

南殿乃藤裏別花れん也唐牡丹 日中を藤成て一也

して花と云也 南殿 雲着没也 左近藤心近藤弘乃

家子も寝没の前より載之の事とてやさんとの用云

云々 貞観拾玖上御守を御守再枝系感と云

度く煙夫後又後任載之也と代乃を後徳大寺大内柱

十一

雨降の事一りる

花事 卷の 南殿様 花事也

以卷の系花を次々年々春 源氏君 十九文

花事例 後深天皇弘仁云お神宗範を花事なりと記之也

殿花事例 村上康保二三お南殿花事なりと事時探韻例

延喜十七年 延喜四年二月お例度り例用之る事

之例天曆時比下孫人けりりまゝ堂上乃孫なりと也

南殿乃孫高別花此もん也唐牡丹 日本を孫成とて

して花と云也 南殿 堂者没也 左近孫心近孫乃

家子も寝没の前より載之り事なりと云らんとの用云

之 貞観拾玖上御守を御守孫枝孫盛と云

度く燈夫後又後代載之也と代乃を後深大寺大乃柱

花事例 後深天皇弘仁云お神宗範を花事なりと記之也

之儀業々々々々り大おろり 記載と也

子ら〜きわをけり 延長十七日名寧及元高詩題

二年二月十七日清涼没花高詩

清涼没へく魚らせけりて席を

ひきのき果居れへ成へし

也

けくさぐりえて他也其他流を

芝題と儒者の定て後〜お詩と一字け〜りて探也

結りぬり或を可みあひ〜る句と用庭上お〜て儒者此

又意の上〜りあをま〜と中〜サぬおをた〜て皇上の流

た〜の花と才一儒者奉作獻題次書韻字盛中院置
庭中文皇上近清次お先探料韻三字置意蓋蓋月
清前階獻之次玉脚徳儒文者文人ホ各進文皇以探二字
見之養官此名及不探字也

〜お〜る〜ん〜と一字取用

〜〜〜〜〜と〜〜〜〜〜と

案〜〜〜〜と諸字を各一字と採用他若十人の事とみ

言詩二句と一字け〜韻との也十四人乃時を七まの

二句と用 花多の委

宰相の中おま〜と云 教字と探得てを委ま由と〜と

官姓名何の字と探〜と必委ま〜

お節花寫又源茂若の春乃字と探〜と為〜事自然

牽〜と〜と〜のひを退亦万事ひ〜ひす人〜る〜也

〜その人を さ〜と別れ人〜と〜心なり

〜〜〜〜〜に 臆病のひ也

之化業くると云りたぬら 化載と也

きりきりのしける 延長十七日六日名^{ニギハヤヒ}年及元高詩^イ題

春秋^{ニギハヤヒ}撰^イ揚^イ花^イ 延長四年二月十七日清涼^イ及花高詩^イ

延極^イ盤^イま^イ日斜^イ延喜^イ果^イ色清涼^イ及へく^イ魚^イらせ^イ計^イひて^イ席^イを

ひく^イさ^イけ^イひ^イ也

このか祿 南没乃東西よむ文のき来^イ居^イれ^イへ^イ成^イへ^イし

そのみり 詩^イ他^イ文^イあ^イ必^イ成^イ也

た^イん^イの^イん 韻^イ字^イと^イ一^イ字^イけ^イく^イさ^イぐ^イり^イえ^イて^イ他^イ也^イ其^イ他^イ流^イを

芝^イ題^イと^イ儒^イ者^イの^イ定^イて^イ後^イり^イあ^イび^イと^イ一^イ字^イけ^イく^イり^イて^イ探^イ也

結^イり^イ名^イり^イ成^イる^イあ^イひ^イく^イる^イ句^イと^イ用^イ庭^イ上^イお^イく^イ儒^イ者^イは

又^イ孝^イの^イ上^イり^イ少^イを^イま^イと^イ中^イサ^イぬ^イな^イや^イれ^イる^イて^イ皇^イ上^イの^イ侍

ため^イの^イ約^イと^イ二^イ句^イま^イて^イな^イる^イ書^イも^イあ^イれ^イん^イと^イ一^イ字^イ用

ま^イの^イの^イ成^イ業^イ也^イ二^イ句^イな^イる^イく^イく^イ老^イを^イ一^イま^イて^イ行^イと

業^イ一^イ語^イへ^イと^イ語^イ居^イを^イ各^イ一^イ字^イと^イ探^イ用^イ他^イ若^イ十^イ人^イあ^イ事^イを^イ一^イ

言^イ詩^イ二^イ句^イと^イ一^イ字^イけ^イく^イ韻^イの^イ也^イ十^イ四^イ人^イ乃^イ時^イを^イ七^イま^イ乃

二^イ句^イと^イ用 花^イ多^イの^イ委

宰相の中^イの^イま^イと^イ云 約^イ字^イと^イ探^イ得^イて^イを^イあ^イま^イ由^イと^イヤ^イと

官^イ姓^イ名^イ何^イの^イ字^イと^イ流^イを^イあ^イと^イ必^イ業^イを^イと

折^イ節^イ流^イ寫^イ源^イ成^イ其^イの^イ春^イ乃^イ字^イと^イ探^イり^イく^イと^イ流^イの^イ事^イ自^イ然^イ

幸^イよ^イや^イこ^イの^イの^イひ^イを^イ退^イ亦^イ万^イ事^イひ^イけ^イり^イひ^イす^イ人^イも^イ一^イ也

ゆ^イの^イ人^イを^イさ^イを^イ別^イれ^イん^イと^イと^イ云^イひ^イなり

と^イく^イし^イく^イら^イに 臆^イ病^イの^イ心^イ也

けふさうめり 血乃感る所を句アホキ也

よそへ目もくろくもして鼻もろなるも也

あすもくもるれと 後ゼツク一首の建ともなり

年一歩ひらくもせ 功コト考列て懐もぬ也 何事も境

おどつむつて事一のど一もや

おくともさゆも 花鳥よの心抱計もて舞樂をな

但天曆之三十一二念院花鳥 陽成院 同十二日肉裏

仁香ニシヤク改名を舞樂即奏也 鶯鴨又比下俗人計も殿上乃

舞するもやい物種を南新あまをぬひ書り

春の言 志シ寫物 花鳥小使あ心樂也 一名天ホウ字家系

とまこく可松小よりてい舞あ心なり 時

春文 源氏へりさこ一とけすもるる也

そくまはけり 源孫何とも不也

左乃れとく 是以葵上へゆ之る也

のたまひしりて 以中を柳ヤナギ久しゆるる也

のりらまきとふ 柳ヤナギ花ハナ分ワケ世セ新ニホ録ロク一也

花鳥小を舞樂殿上の舞初録とゆめつとくもなり

源氏れゑの所とハ 下ふとく也 源氏の志乃をハとけり

とぬとや 符と枝エダ藤の何庭上いまもる文意とゆふ

たてく又ハハ階下とくみて舞マシ項コトするなり

大しけり 源氏れ舞勝マカふふりて花の心一も

まのたのけり 源乃よとくぬくはさうとく

や古今引あまては明也 春けぬ心はたうゝ玉初て
田舎くこふ物言ひをけく 心玉お二むあつ心を
明くふと玉とる物也

西心れうちけり 女房敷の人よ種物言ひ事たう好也

と云ひる也

かうぬいこころ花を臺の川へとす女房ま令ぬ
ちよのゆい
三のちり花三の字のまよひへこころのわらふ
た三ちり才三の同よわらふとよふこころはゆよころ
おまこ

さん乃ちら 弘敷段 南およと紙屋とる廊あり奥れ三
のやれるりや あれたんふおわくは廊ありうれ
張かろ敷と云南のうぬへせふ前よたこあり南才三
おあこころくくんとこころたや 咲
水の廊 登花段へ西廊也

のちりこころいそ思ひけり

お月乃月敷く 思もせむ雲をよくの春乃はれ影乃敷

おまこ物うるま 大江千甲也

こころいぬまんころ物り 吳中よんりの字也

こころいたれ詞よまあ〜千もよめま也

ぬりま敷のあ 心を付て可身護月まゆ〜ぬ敷まま〜不

みう一月のぬ海入をうみわりの心おまけくま

女日記の月を思ふ也

下句を尋りた方〜か〜ぬと云ひる也

月乃へ 姫自嘆女への才也

るんてり かく〜と演る也

千一

さしあぬ 不登 不用心死

中しくうれ 直をある事の中しく思ひたもうるうらの
また中一のほら心ひめて可成死

又義中しく世まれぬくうりさともやとちう方町を
中しく治定志くう討や世な建くうの勝たぬと可ひぬ
又あそ世ふまぬとれや付てなり

ふゑ 勝月秋洲春文へ也

ふとちなるまーとるま

一乃るうと思ひくう

は二三月おら方結めり但花事此

故事のなむらう成る

すらめわりり花河海よりあつひの人のゆとて一ゆれ
葵の上の家風のゆるれいなるを春産の中文のゆと
りつやそれもたうゆとて中まもかきううらむ
もいんゆらこ
故事花事と名目男踏方の存二三月よりうの終り
ゆとらうそれと花事よりうらむら

うの五明 義事此物なふた大臣のむらりの義事ひり

海路ふとち経くはうとやうゆとちせぬくう

れまへうらゆりて 源山あより出ゆり時惟芝おぬとて

経中一なり

水の際 中まればの件ハ玄鑑門方也

四位女お太中并お大臣息也

何れ 退出る也

始末のうめ 止れ討つゆくくとならぬ外ぬぬらぬ

ころとねのひやれたまおなり

櫻乃三葉さきの 檜菊の香三枝はくをゆくのゆらぬ

のうとやう面白く裏はぬらうら

さしあぬ 不智 不用心死

中しくうれ 直をあまき中しく思ひたもん同うらの
まか中一のなほや心めて可法死

又義申しく世もれぬくうりさともやとちう方河を
中しく治定志くう討や世を建てるの勝たぬし可心死
又のそ世あまねとれや付てなり

ふゑ 勝月夜別春文へ也

ふしるんしるも ちもいやふとちなるもーとるも
おくまりくろもや 雲上のるうと思ひくこと

後宴 惣刑を男踏き乃後二三月おら乃結あり但花事此
故事の老びーら歌をー

この五明 義事此惣ふた大臣のむらりの義事ひーの
故事ふとちを種くになんかこうめくもせぬ入り
れまへふり海うて 源山赤うりおはよ町惟光お海とて

種やーなり

水の際 中まれやの件ハ玄種門方也

四位女お太中并お大臣也

何れ 退出る也

ゆゑのつゝお 上れ討つはくしくとならぬ外給ぬらるる
よら上れのみひ叫たまあなり

松乃三葉まきの 拾菊のあ編三枚はくをけくめりあ
のうやちう面白く裏をさうさうー也

あはれわりの世まゝあゝとありては

抱双紙よもなきのさねなきとあり

めなれとれと 老の抱もなつりう抱なりては

や人の心はらひ也

よふさうぬき 源氏物語のさう透達とつり

意為信の年

五の月乃ゆく衆を秘する野守は鏡をまへりてけり

いふをきて後約へり 夢とて言ふも老なるを

後殿 源氏見ゆりしあゝとて人己殊よは巻勝

て整ふ心となり

ねとあのゆとへ くれまを 双紙なりへ

まじれを 雲は心 源氏てはりしも出ぬめと恨はるなり

まじりり 心まじりて也

わうりうふわらぬや 費川律 濃別也

わさほのせしむるはらぬ抱やうりうふわらぬや

てたもあくるつまおやさくのほはまきてはりも

あうあゝとやう死の市うもあつひひり

れわさくちやも不及くをりうりうふぬれ抱の言はと

をわりりう引落おなり

一日れ 花宴也

めいわうの清代田なる こそ久しきこと可い海

陽成 光孝 宇多 醍醐 河不及之

文の... かめ... 歌心海詞... 也

の二字と... 歌心海詞... 也

の... 心... 也

心... 可... 也

み... 心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

伊...

心... 也

心... 也

心... 也

心... 也

又と... かも... 討也 歌心海討るや

心哉... 遺迹ケイセキの二字と... 歌述キョウゼキトよる

人のまわ... 心せのあや
あう... 可心ぬ

みら... 源氏上... ぬと... けを

ゆへ... ありあ

れき... ほどく... 別勅ベツトク一... 徳を定

そ... 松とよむ 類ルイ カダカニシキトヨム

う... 物中... 仕へぬ... 申... 上... ありあ

と... ありあ

よ... 柳菟... ながめ... ありあ

あ... 後代

ま... ありあ... 春... ありあ... ありあ

さ... ありあ... ありあ

ま... ありあ

并... ありあ... ありあ

ま... ありあ... ありあ

弓... ありあ... ありあ

あ... ありあ... ありあ

げ... ありあ... 伊勢

あ... ありあ... ありあ

伊... ありあ... ありあ

分三平エノシタチラ多花 聖太刀借振子心子の並布袴

大男人きらりし不叶しや

くしのまぬ 巻の袍事なり

何されしと大志まうこ 親玉此姿のやうやとまよや又

いふ直衣姿と云大人乃姿と不めとる詞るを 嗚

袍指受取て裾を引きよのほはれ事なりや並衣小

裾とりしれ事志とけるれとや

か一文 あれたんの女侍乃取服なり

とむうしともあわわこ

袖のなせ 踏言の町れやきぬおとのあこしくしゆ

め記らるとまうしゆすなりひはるる

ふりりくともす有蓋わたり花葉花お流し板取友姫子 寄れきぬの袖取出せなり

三多後后道長女 大喰よ女房の袖口とくくくこれ 鳴の儀式乃町をせきぬあり

知所ももこいこ女房ののこりつらつらとて袖口と 袖の儀となをちやくとるれ

有蓋とらりまかやまこくくまぬねわと思 入人里

あふもりくせ花侍房ののまむの下よりつらし人わりの 伊波物経は

兼平の中おの行平中物とれりしとての巻とららる友の

咲花乃下子涙取く人おほ三ましとらるる友れは町も

二条乃れとくと忠仁とよはしとや 友れ花小くはれ

花鑑録しや

引き返つても 引よをよる所なりを

ようしぬんし 源と女一女と姉妹とてましまさるる

いやはと人こそゆのそりて先とすす物に逢とせ
きふくくゆを トコ 夏冬中あり何のそとあははとあ
珠勝とせり

ももまうしふ 勝月うしむとまらまうまがと思
るけりしるを

あふさよとまて 菊のまをくんためるを

ふ川乃こまう人子わいととくくううまくのすまを
うまを菊と云う魚くろ菊れまをやうて可む得しや
石河堂後之前 さ簾人は川子便宅志しるるまてし
お母とけ ふ川と引をててのいりり

あやとまを 謂と不人ハ課の程をむりひてり人かや

とにぐ

あつとらま 子れ結縁あり かのみ月をかうぬの

事也何おとあふと思ひて也舞あつとらま

むいろうとま 源れまの海とふのあへ何んといふま感

あつとらま 女日回されし日

りしるをし面白きなり

ひとうれま 花相違 也あつとらま 花物う

女れをまうすまわあまをとあす源乃姓也あひたる

を娘 くれともいふ けりしるを

源氏一節あひあると旅状のし

俊成邸 世夷々之初まじりし御書事 珠勝の上は

よしの 友壺ふく人の様よふしゆふ家也
涉乃乃ふんくくもそふ小也

い討しり源氏を大おおはしりゆふるみしちる業
世九 大将よん三位中にお宰おふなりせけひて大お
うきませゆの宰相の大おとやしきさすくくくくく

つた光りー 後二条関白通承保三女七位奉後
月四日三日色大お 顕職とて後力なりつれくく
— さ職也

むくひよや 而白書せり友壺女乃ゆ事なるゆへし
くく人のやう 桐原門位を去ゆふゆへおふうひれ
ますをいつり

今さゆえ 弘徽殿かゆ此ゆふとゆふととと

朱雀院のゆ位よりせけくも皇太后なりへし 元委
まけぬ人るふ 弘徽殿を内いふまをを友壺ふん安
うひれくくゆへゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

春文とそ 手向冷此事と書せり 立坊ハ 史禪の
ゆ乃るゆなりへし 冷をま文とや事なうゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ

大おれおふ 大おと云事ゆ巻ゆり初ぬ系後より承相
まて意職也 源氏系後の大おなりゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ 記者の討也事及事の極小書り

前坊 立坊なりゆ位小ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

女之文 弘徽殿乃御殿のむらじら高より御もそのり

一なるなり

すらしふ 御院より成たすへしさいわいなり

又ふこよなり 御をれお定しるよおお多しるなり

御禊の日上草め 御院御禊之事し定まて東河より

院へ入御初御院とて大内の本

の後の初使より大内中御と各一人奉儀二人四位五位各四人すつて十二人の初使し是とてをさうさうのつうは氏ちねい奉儀二人の中より一をとりてこれとてははよ

院へ入御初御院とて大内の本

乃前より吉日撰て御禊事あり別業野北野の文

に入御小乞と二度乃りへと云今奉三度乃御禊之野

文へ入御あつた二度めの禊をりへしとて初度の後

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

以下御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

御儀奉儀一人御を二どの御禊より大内を奉儀

女之文 勅徴教乃御殿のるるに萬一御もそのより
— なるなり —

すらしこふ 御院より成たすへしきいあひり

又ふこよひ 御をれお定し上お打多しるる

御襖の目上達め 御院御襖代事し定まて東河より

御後多てしこふ初て御院へ入御初御院とて大向の本

膳職或は元也府をてと息して 借心し うきまて三年

御齊の事あり其年乃四月に御社へ集給ふんとて

参り参り 吉日撰て御襖代事あり別堂野代野の文

に入給ふと二度乃りしへと今東三度乃御襖代野

文へ入給ふと二度乃の襖をりしとまの初度の後

以下御後系後一人御を二どの御襖より大御を参儀

以下御後代付を延喜式おみしと御而十二人の

御使をとりと定とをりし源氏大御を系儀二人の中

たるへし御度代事しをい巻をみしとこれ也花巻祝をま

けて大方よりすとのなり 時

ト定 うきまひの定 大嘗会なや必まへしゆまの

たを御子方御部ト定ふと必目あり御折し委

下りし御の文 御襖乃日の御使を御を御深装束と定

も唐装束ハ倭 用杏葉と作るやく見れ唐装束のたれ

し杏の葉或し御せつと先深装束とて心くは

御子人し

御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し
御子人し

さるるゆれ 見せあやまきいひりし人し

大おのりり乃後力 のりうめれ後也

進歩お盛お曹生城一人のりいりわさしり

もて云 一頁其のり乃後力やもりり皆地なり

會上のそ徳力ふつれらる事例るなりなり

い物神寓云と可むゆ源氏大おと結構よめんだあ也

中一類後と云 虎人お端の荘乃兄弟なり

草木もるひのぬき 物種悉子之徳風小人海草と之何

偃 初為風行 應如葉靡 又選

つがゆううく 小神をけ不さるる也

市女をさす さまぬとま中ゆひたるをり人可

すけみそ 齒やすえらるひうや

のこまこめたる けらうううくけうあ

並打ときこめたれなり

てとけくもそ ち減合てれのむ神也

司る相女 花沙漫也不及其後る也

毎うく濃 是又一振の見物と云りうさ後くせ也

あつたえ 櫛の又まがり

祢打やめもろう お祭あふあれたんれくおひとをむ

のりりて源氏をかめてあやうくおるなり

常志を平比 櫛のひちりあしわくし源の所心中

又めれたさを大方るともむい福んころなりやも

Handwritten notes at the top of the left page.

Handwritten notes at the top of the right page.

たふ乃馬場より又日の駭射れの中出る急をすべし
とつりて夜夜々夫内れの時を水の際まで一糸を束へ
と紙をよみてたむ道の程とわくるなり 車をとて車
立前あゆむ

つらきのけはと 源内侍 捨棄れ端とわくしうもあて
付しうの

もうなや奇 葵と鶴と云むあり人へふあふとふあふと
祇のゆらし 或はきるひきふの使と物とつとつとつ
されとのひかりとあり

とめらうら 引まなり 只違へし 隔つと云む
源氏ふるあまはむじなりきと云詞と可む得也

のさしけりさ 後撰守心院の日記見ゆら

女れ車よりのひ入てゆき 徳人不知

つぬる八十段人のむ葛つりてうねじあひてふあふと
也し

ゆあたまよりあてよりあおろし人のあひてふあふと
津板あせせし

八十段人とさる下れつさしや城と也源内侍の上と津
あふりあひとよまんと事なれはあ今物あふあふと
目とらあれあまよむあまよふや

梅しきもあ 又内侍 葵を人へのめなる葉のあふと
入とあひ 業花物経 弾あふ和泉あふとやし車と

私云花は... 此の世の物忌と付く... 十... 一...

紫身新式アのあの益益... 今葉前の益益... 惟唯どか... 源氏と世

いふおちも... ぬい... ぬい...

おの... かなり

あ... せ... せ... せ...

お母... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ...

約する... 約する... 約する...

約する... 約する... 約する...

約する... 約する... 約する...

約する... 約する... 約する...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

あ... せ... せ... せ...

紫身新式アのあの益^益ぢろりして紫乃^二錦の袖忌と^三せしを
今紫前の益^益ぢあもる成るしうれを申う九丁の
惟^{カモラ}どかふるふらりてくるしうれを申う九丁の
上人みんごふうし益^益ぢいふりあもるふらりてくる
おのりなり

しもまうしぬ あしきふらぢあひてふらりてくる
お母しめと源^源ぢい中なるる

お母うん あしきぢあ人のあし車入あつてふらりてくる
れきあつてふらりてくるしうれを申う九丁の
あしぢいふらりてくるしうれを申う九丁の
あしぢいふらりてくるしうれを申う九丁の
あしぢいふらりてくるしうれを申う九丁の
あしぢいふらりてくるしうれを申う九丁の

釣すう紫乃 伊波れ海^海釣すう紫乃うきまぢあひて
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の

お母しめと源^源ぢい中なるる

伊波れ海^海釣すう紫乃うきまぢあひて
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の

お母しめと源^源ぢい中なるる

伊波れ海^海釣すう紫乃うきまぢあひて
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の
しうれを申う九丁の

只せ其れ 霊けりりまゝもなり

人子もあゝに 所息所ミヤノトコロのせ其也

二条の君 誓れれとあひと不意してゆへに

親の所方 夫大后殿乃御親の本へん

院とて 桐壺帝ノミヤト

うの殿より 権門ケンモンを仕色しと不意物也 恨と不願事ウレヒコト

大るなりなるる

ゆゑに御思ひのなされ 所息所 祿事一がかへは出

きて所治シニホリ也

あやまぬふ 葵上乃事をうゝと治ふなり

うらひぬ物からあ 所息より取たまふ物也

おれりうをさされ 伊豫下向之事也 六代心中成し

いとむさう 葵御姫アヅマノヒメのるなり

連りれ りこはるなり也

神のあゝとひちと 所息所れ所方 源氏御経身一透シロイリ

うらむ 群入りとふ 一うをうらむとふとらむ時田子を

神のあゝとひちと 所息所れ所方 源氏御経身一透

山の井れあ 一と浅きといはん用也 悔一とらう汲初て

たは浅きれも神乃とぬれく山乃井の水

源氏心を振て中れ舞り浅き理なり

つらふらもつら 源乃所心よおのひきめん方もさる

と思はるる 徳人のあゝとらう

三十一

只せ其れ 霊けりりまくもなり

人子もありに 山息所ミヤノトコロのせ其也

二条の君 雲れれとあひと不意してゆへに

親の所方 夫大后殿乃御親の本へん

院とて 桐壺帝ノミカド

うの殿より 権門ケンモンを仕色しと不意物也 恨と不願事ウラミ

大るりなりるる

ゆゑに御思ひのなみされ 山息所 祿事一筋かへは出

きて山息所也

あやまぬふ 葵上乃事をうらみゆふなり

うらみぬ物からあ 山息より取たまふ物也

たけりう魚され 伊豫下向之事也 六れ心中成し

いと心さ 葵御姫アヲミメのるりなり

まりれ りこは香乃心也

神のあくといと 山息所此の方 源氏物語身一途シヅメ

乃ま也 深フカひちとまうしをさるる山息所

おまうのゆへる也

山の井れあ 山息所といふん用也 悔とてう汲初て

たは浅とれも神乃とぬれく山乃井の水

源氏心を振て申れ葵乃浅き理なり

つらふらものつら 源乃山心よおのひさめん方もさる

と思はるる 遠人のあくとつら

山息所
伊豫下向
源氏物語

三十九

釈文をさうしうし入 大因にた急門の目に入給ふへ
とりの入里 徳目入給ふんす也神禳の目とりの所
くし可也

二たひれは禳 釈文徳目入給ふんす也又野文り
入たさんんすも東河まゝは禳乃事あり是を二た
むのほへへともり但群けの時は西川大嘗合ありん
とも黒本のまゝと川 愚まゝては禳まてみ教と太林ま
へ禳禳ま也 天子御守也 別勘

禳ま教方の 奏上也
まゝとれんれ 法延生之るなり
かく之経 ぬびの何不改に流華経讀誦

うらそへんすも 禳ま教まじ

流れこがれく 奏上は靈のつもて禳まごうら海あり
海まごあまなる也

いおしう 源安より名流とれしみ流ありとる也

おなすもあふせ 来世も夫婦をむむらふ也

れともまむと 親子を二世とらんともりたなはちあり

お母まゝおんなり

りてありす也 やますてや也 靈討まてはるれとかり

物とふんの 故撰 和泉家 物おのをもはの意の

我の身よりあつれおるまのこころみ

歌まひ身 志備の補文 玉はま川を流せしむる

りふさく一るう 母層衣の心るを

あめぬ事 年未何事を備つらんとなり

まれつと 妻上乃母ま也

れま一雨ううう

あぬまうのく 大まれおとるま人の操うめさなく也

一となり

はまうりを免とめて 妻上の源と又見ゆまうま

表うや

秋のほろあー 八月 まを縣る 秋まつりまあーと

云のゆふ也 司^ツハ^キ常^カ縣^クを^シ法^シ國^クを^シ地^シ

免^シ 大^シ長^シの^シ免^シま^シれ^シか^シう^シま^シ法^シ家^シの^シ人^シま^シる^シ

つらものろむ 果を也 勢^シも

ゆふと 勤 又響 日中紀

物あそめこれ 人又権^シか^シま^シう^シる^シ

所^シ死^シな^シく 死人を^シ枕^シ成^シう^シる^シ事^シあり

く^シな^シぬ 心人乃^シ方^シう^シりの^シ言^シ信^シを^シ祝^シ忌^シう^シる^シ

め^シこ^シあ^シり

鳥色野し 死去を十日日 女日也

もこふ 吳中 海ふ事とあり 回ひ

又選才十二郭璞江賦云 蛭蝮以洽^シ注^シ云^シ林^シ蟻^シを^シ蛇^シ

る^シと くらふものありく^シ所^シ也 蛭蝮を^シ川^シ魚^シ也

く^シよ^シひ^シあ^シる^シと^シ教^シ也 日中紀才二豊^シ玉^シ婚^シ化^シる^シ八^シ

猊熊^{シウクニ}来^キる^ル 麈^{ジュ}座^ザあり

つひ^{ツヒ}く^クき^キ 殿^{テン}室^{シヤウ}の^ノ薬^{ヤク}齊^{サイ}也^ヤ

う^ウや^ヤぢ^チひ^ヒ志^シを^ヲけ^ケし^シ世^セも^モ 源^{ゲン}心^{シン}夕^{セキ}芳^{ホウ}を^ヲめ^メら^ラふ^フこと^ト也^ヤ

時^{トキ}も^モあ^アま^マ枯^コや^ヤを^ヲ人^ニに^ニり^リの^ノ影^{カゲ}へ^ヘま^マを^ヲみ^ミり^リふ^フも^モ

き^キ拘^コへ^ヘ 引^{ヒキ}方^{ホウ}下^ゲ句^ク相^{ソウ}遠^{エン}

念^{ネン}佛^{ブツ}杖^{シヤウ}腹^{ブツ}方^{ホウ} ち^チり^リ三^{サン}味^ミ 引^{ヒキ}お^オ阿^ア弥^ミ陀^タ經^{キヤウ}

乃^ノ子^シも^モ志^シを^ヲけ^ケり^リう^ウれ^レ 吹^{フキ}よ^ヨま^マは^ハ乃^ノ志^シみ^ミま^マる^ル杖^{シヤウ}風^{フウ}を^ヲ

又^{マタ}う^ウ死^シ拘^コと^トお^オり^リひ^ヒけ^ケり^リう^ウれ^レ

乃^ノ子^シを^ヲく^ク杖^{シヤウ}の^ノ小^コ煎^{ケン}風^{フウ}吹^{フキ}あ^アへ^ヘふ^フや^ヤり^リや^ヤ人^ニ乃^ノ愛^{アイ}み^ミん

は^ハけ^ケ 呼^{コエ} を^ヲ合^カて^テ也^ヤ 不^フ及^{トク}引^{ヒキ}方^{ホウ}死^シ

筆^{ヒツ}此^{コノ}一^{イツ}を^ヲさ^サし^シけ^ケる^ル 却^{セツ}け^ケり^リう^ウれ^レう^ウれ^レ也^ヤ

あ^アれ^レあ^アを^ヲふ^フむ^ムの^ノ紙^シ 花^{ハナ}田^{デン}も^モあ^アの^ノ交^{カウ}な^ナる^ル也^ヤ

服^{フク}者^{シャ}の^ノふ^フへ^ヘ乃^ノ紙^シの^ノ多^タ也^ヤ兼^{ケン}も^モ回^{カエ}る^ル也^ヤ

さ^サし^シと^トさ^サて^テ さ^サや^ヤを^ヲあ^アも^モも^モ也^ヤ可^カか^カつ^ツは^ハな^ナら^ラぬ^ヌ也^ヤ

て^テ是^シ也^ヤを^ヲし^シと^トさ^サる^ルなり^{ナリ} 呼^{コエ}

ゆ^ユめ^メぬ^ヌ雅^ヤを^ヲ 又^{マタ}同^{ドウ}薬^{ヤク}齊^{サイ}時^{トキ}か^カら^ラる^ル也^ヤ 呼^{コエ}

人^ニ乃^ノ紙^シも^モふ^フあ^アつ^ツし^シの^ノま^マを^ヲあ^アも^モも^モな^ナら^ラぬ^ヌ也^ヤ

是^シは^ハ後^ゴ用^{ユウ}之^シなり^{ナリ}

人^ニの^ノ世^セ孫^{ソン}亦^{モト} 難^{ナン}ら^ラし^シく^クと^ト難^{ナン}し^シ也^ヤ

ま^マん^{マン}と^トあ^アは^ハさ^サ又^{マタ}乃^ノ詞^ジら^ラる^ルま^マん^{マン}と^トあ^アは^ハと^トなり^{ナリ}

つ^ツれ^レな^ナの^ノ紙^シ筋^{ジン}や^ヤさ^サて^テの^ノこ^コも^モ也^ヤ

久^クし^シく^クな^ナる^ルひ^ヒま^マつ^ツし^シひ^ヒ 服^{フク}者^{シャ}より^{ヨリ}精^{セイ}を^ヲあ^アへ^ヘと^ト也^ヤ

ひらいたの 雲れくろくまのなるる

いよばく 又討 服者のむちりなるる

とまふをま ひとくらくまの息の物氣に成し

とりのめつ ねなるる ころなるるなるるなるる

むはく 成となり

うらむ 患啓 教訓也

清らんせきのおと せよの服者の方りの又なる

と清らんせきのおと せよの服者の方りの又なる

ぬ由やのころなるる討なるる 一 呼

ほゆ中より 澄ぶとも 澄ぶとも 澄ぶとも 澄ぶとも

まど 清てきなるるころなるるなるるなるるなるるなるる

つとむしぬ 頼ともいもまき入むううしく

いよ ころ井の町がきき服志れ又清らんとなり

あめぬつ 清ふとむの鬼うや

こせん 傍 相壺とほ兄弟 研文のめいなるる

そのまのりつこふ 是場ののりつこふは息所と相壺帝の内

ろりおそく さまさくんとかり

大しこれせう 清きて 匠息所は仁となり

野のまればうらうい 総司より 研乃なるるなるるなるる

へし二年めの八月也

の目 一やうにち 四十九日まてを 澄ぶふかりなるる

はりのあふなるる

Handwritten notes on a small paper slip at the top of the page.

三位中にお 以中三位分の詞よりみくる

のひささうひのまわのちさきりり 句 秋のふりな

みいよしの花をハ未摘花のゆく中ねのちりんと 示摘ましくぬらんしあうそ
よまゆいあつれをいんせねいさうひの月とちこけ
まのまこほきのあつしおねる林のゆくそいこま
のちちち林のちりつ

るゆりやたもふけり時のちひはけふ別あはれを歌心

わづらへし

まてくを 不引せぬ 世中とあつひひく

のまきくきつうふやりのふりんとまを

町るうりして 別後也 非日見 十月ふ歌てなり

わいおもひふりあて 姉妹の服三月暇女日る

純又巫衣平一縮そ練ま裏反へけし 世裏揚貴を反冬日純

又後花を瀬也 十すうしを十月史心の次は又後う
すくふをかり

ぬとりのと 劉淑得 劉淑錫婦ニクシテ居ルニ身得作テ送詩之

相逢相笑両如友 為海為津今不云 女郎魂遊寄を敬

鄂洪濤の煙ぬ敷只應心在漢陽は化化勢巻 雀死

宋必高唐賦注曰帝帝之季かみ班鳩来羽而七對下巫山

臺所謂巫山之女唐之昭且のり 志巻おのりぬ

身之陽臺之下 巫山之唐陽臺も日ふ也

ひもけりりや 孔象也 直衣のいひをけりりやきり

るるけりりや 花巻いりし

あまハをり 輕服三月かたも志娘をぬ由花濃けりる

三位中にお 次中三位今の詞よりみしる

うのひささうひのまやのあきりり け 秋のふりな

つさうひ乃月よ次中源を赤橋まきぬらんしあき

一 けひり 町又林を障まよりれおし程いと縁少しけ

るあやたさふけ 町のふりけふ別あはれを歎心

けうらへし

まてくさ 不引せぬ 世中をひくひく

のまきくまうつふやりのふりんとまき

町るうらして 別位也 非日見 十月ふ歌てなり

中におもひふらふと 姉妹の服三月暇女日る

純又重衣平一緒を練ま裏衣ハけ 雲裳揚衣を衣冬日純

又後花よそ瀬也 十すうしを十月史心の次よ又後う

すくふまかり

ぬとりのと 劉禹錫婦ニクシテ居死ニ身得作テ送詩云

相逢相失兩如夢 為爾為君今不云 女郎魂遊夢を白

鄂汝漢く燈ぬ敷只應もを漢陽は化化 雲 雀死

宋必高唐賤注曰帝帝之季女也班婕妤也而七對下巫山

意所謂巫山之女也唐之州且のり ちきおのりぬ

身く陽臺之下 巫山を唐陽臺も日不也

ひもけりりせ 孔雀也 直衣の入りまけりりやきり

るるけりりる 花きいり

西遊八巻あり 輕服三月かたも志強くぬ由死濃けりる

Handwritten notes on a small paper strip at the top right of the page.

志代濱海よりなる海へは 岸

知れずある所 狸服もぬる緒を用事 例あり

長保三年二月一日定子皇太后崩す 御霊園白紙火災

下院を懸し 下院よりみしとる

政事 齋院の子細を注ぎり

海とかりり 以中

ひとまじしとの 以妹乃るすはれとる

み一人乃き 海と波はれき八月やうの時海といふ

成らうとや 結句お餘情可也

何やう 以中 大まもはれをなり

をのーのころころ 苦痛也

括り下葉 以中勝く

おまの言 源大文へ乃き也 夕雲を子の養親うらな

一めさうとにりる也 小成りおあてこまうと

おらんこまぬらりるる心合あり

木の系よりりりお 後成は詞をとりて 嵐ゆく嵐乃木此

系れ目よそへてを強く成り月の涙くれ

の片をみて中く言 垣かきけりへ夢の事也

かゝぬと紙の建と 源より撰へ久新信終とくまられを

きてさやうの袖と成らうと清目よりあつとるを

その袖と云心丸 海ニそきるれともまへくまられ

まなうれやうの文はらんとの片も清目より成らう

あそおのし 風流もろくもくも

みぬほと 雲の雲事もなく物も一もまげにける

なるるー ぬれやらうんとも又ともいふ

根ももれ事いふとなり

中納言君 葵上女房也

これ建して 三味建来乃みじんそふく離せよと云

ーくーんやまーくーも

いさのむくかたり

あしもやま 白あそれー源也

いのりう 命いふむーあるお袖なつて何の別なの

はーくーきー 研

火とうちなりぬ け詞めくもん也

とりま記て あでぞし 葵上ぬひんー思るびり

程るま何こめ うもーあこめ 女童のまら袖也

くまぼう 蓋葉を袖子と大略回し

ひーと 源経也

ゆもを 源れつる流る 務なりんとも

まあーむまろけ け時乃さぬお像へし 四十九日お

とこてぬ款のぼあゆなうに 唄 今源氏の表也

ゆふお流れ言いけ 儀承らん書換ぬ也

きふあも なるー限りとも大お海ー先するま

とくれ 末のありと此素や世中乃てく進たのたあ

しるくに花よりく我ふたわせもあれーこれらうい
うらてくか物まのこつ
今より此は花よりくをぬは月夜の内竹のうこの
ゆらまねの内花寮のわりの脈をと裁縫するあこま
（ここの居の女はるる儀）

一 なるはらん

善ぬがとふ 源のわうてふとほふ同なり

とらとて あつまりそ也

おがーとつまーと 夕暮也

けふとつ ねとつなり

いと穢ちうなり 源也

中く今そ 夢上のれもせーねハ油乃心もくとそ

あつーとやた大居敷のまへに詞の首をまめを也

うらむんれ 夢上もうせけひ 源はつふたを只もぬり

のあつくとなり

うらむもやまといも 詩をと源の夢也

碧巻の冷花を室同枕を衾注与共

白皮文集第十二唐中 引勸慶 旧枕を衾注与共むけ

源氏心也

るまむらうさ 我心うら夢れ魂に推せしとるま

中身と引くるてなり おとたふさうておれくむら

もるれ床よ福し素ううれしと

ね乃む志ろー ともし波書のをくろん

と町ふの長恨秋 吳中もそをまつらめ

一 目の花る海をー 上の詞は括く下を乃中ー

まうたん松子かきまし 町の花といへり 度爰と床お

用心也 必恨言やや大まふたてまつらせけひー 其枝の

源氏物語乃中りみりし

之みゆらんせ 大まろし 大尋のみをゆへに

のふりひかさ 葵上の事ききしとてしり

おしくまきとす みるまき 葵上の事とる

れとかくしえ 女屋中上藤也

敷れれり 大長身の詞乃やうりおのし持まりき

人もとまりゆへまはかたりゆひりてんてまよわ

又源氏れれさる人てん持す人くうさひり

思ふよや 河も瞬

中文 友壺

あるれ世を 源氏也言

めふらひく 葵上の事

きふまてもてい 詞曲云やけりしちあふとてい

めらと 瞬

むらしのうへのゆり せ文の袍を夏ハ穀 冬ハ平箔

又ちち乃袍のこし 回云無文冠を極め何

一書書の袍を又此羅也服若ハ無文羅用也 冠もま

又巻縷服若乃定あつ出立也若し人羅紋と付しん丸

あいまれ 巻縷

いばし 葵よ女房故 おけしふらり

御あうきく 服衣とのるゆひーるや

衣う魚 十月又衣なるる

志りしつゝ 二条院れ内東の對なる處へしうら

あすこふやうらふら

れあやしと思ひまゝ 紫山平春と成訪らんとおりの

とも又しつゝなり

中ね志つゝの波をなすの對するは是れすゝせらふ也

目つゝ 夕暮の海りハ大文のなる

みけなりらめ 紫十四文

魚をばえ 文字乃つんを何れまゝとせりのなり

れりけちらふら ねとりれれの言や思ひつゝ成て

とを思ふく思ひつゝ成て 句 せらふらなる

るしなやとつゝ じつゝとせらふらと紫の心の中

とせらふらとせらふらと何れらなるて双也

志を 源より方へなり

源 源を源にそへるふを志すの心成し

あやなくもや 何れまゝとせらふら

まゝくおれしを何れと隔れまゝとせらふら

うらなく 親とも源を思ひしつゝ也 紫心なり

の乃にれりらひ 十月亥日他辨食之食人病 菓子

七種餅粉 大豆 小豆 大角豆 胡芦 栗 柿 糖

のら思ひの 紫 熱傷されしつゝとせらふらと也

つゝとく 菓子餅を食ふ三日乃れれを一食なり

菓子餅のたぐし 南産の海きりけりとの成し

素うまのれ 源の祝言乃或とへ給ふらんとなり
ちこゝろ ちのくひのふまらる人也

あうく 花足巻と給れ申へ入らなり

まてもうらうくに 虫納言は花経より一惟えいひつと

たのふなり

衆とや 若草の朝も枕をまじうめて衆とや隔らんにく

うらなふ

世中乃つし 葵上取とや

のりきりえを 内運殿より 朧月夜ササキの成りく 且載逢ササキす

所也 大石の女乃成織シヨウとや

これ大石 朧と源へとなり

ゆとみくと 悪伝ひ也

悪もやなりて 源沖心と

伝もまの 男の爲ニホシキ憎子ニホシキ乃心とや

はれをまさらぬ 沖楊すま交野の伝野れさる業のまん

ハマさうて意うまささる

年もうるらぬ 源女二歳

みぞのげ 擬祭

礼記云 男女不同ニホシキ擬ニホシキ初ニホシキ不ニホシキ教ニホシキ於夫之揮ニホシキ擬ニホシキ男女同ニホシキ

ふくけぬ物也 けりるそりの成るものとき

たふほりき 面白詞也 昔ふを多あひたふふふふふ

まへとなり

私に和泉守アおまへののたはるるに拾遺トアリ

